とある不幸と不慮の事故(エンカウンター)

AFURO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある不幸と不慮の事故（エンカウンター）

【Ｎコード】
Ｎ９２０５Ｓ

【作者名】
ＡＦＵＲＯ

【あらすじ】
『そっ、ぜーんぶうそだよ』

不慮の事故、幻想殺し、禁書目録、超電磁砲、一方通行、欠陥電気、瞬間移動、風紀委員、無能力者、常盤台、超能力、そして大嘘憑き。

次回投下予定は未定。……、予定は未定。

とある不幸と不慮の事故（前書き）

再構成しました。

一応、めだかボックスと禁書のクロスです。オリ主チート物の部類になると思います。てかなってます。

拙い文ですが、それでもよろしければ、ご愛顧願いますよう。

では本編です

とある不幸と不慮の事故

四月某日
それはけたたましい電子音と共に始まる少年の一日は、

「……ぅ……せぇ」

まだ始まらない様だった。

――――――――
――――――――
――――

「……、」

端正な顔立ちは僅かに歪んで、切り揃えられた前髪から覗く瞳は、どこか不敵なものを感じさせるが今という今は、焦りの色がうかがえる。

（これは、まずい。完璧やっちまった……）

少年の目の前には大破している電子目覚まし時計。
それは既に、本来行うべき役割を果たせなくなっていた。
「入学式から遅刻はねーって……」
言うが早いか、少年は素早く着替えて部屋を飛び出していく。
（エレベーターや階段なんか使ってる暇なんか無ぇ！）
少年は腰くらいある高さ手すりに足を掛け、飛び降りた。
端から見れば自殺にしか見えないが、決して自殺などという愚行ではない。
ここは学園都市。東京の三分の一を占める広さを誇り、大小様々な教育機関に二三〇万人もの学生を抱えたこの街には記録術（かいはつ）というこの都市特有の時間割（カリキュラム）りがある。詰まるところ、この時間割りは超能力を開発することだ。
一口に超能力といっても多々ある。例えば発火能力や発電、風力操作に水流系、はたまたベクトル操作やこの世に存在しない素粒子を操るといったトンデモない能力の数々。
そんな能力があれば、即死できる高さから飛び降りたとしても、さして問題がある訳ではない。
七階建ての寮から飛び降りた少年は、地面に吸い寄せられるように落ちて行く。
目まぐるしく変わる景色、頬を撫でる風、それらの感覚を味わった時、少年は地下へと叩きつけられた。
内臓は破裂し、ひどく打ち付けた頭はへこんでいる。
「うわッ！？　ひ、人が落ちてきた！？」
ウニ頭の少年は、思わず狼狽する。

訳がわからなかった。遅刻しそうで走っていたら、上から人が降ってきて。
パニクっていてもしょうがない。とりあえず声を掛けようと少年へ近寄ると、

「やべ、足震えてら」

乾いた笑いと共に少年は立ち上がった。

「なッ！？　ちょ！　え！？」
「あ、時間……。」

ズボンのポケットから携帯を取り出して時間を確認すると、少年の眉根が動く。
何かに駆られたように駆け出す少年を黙って見送るウニ頭の少年。

「なんだったんだ……」

言ってからフリーズした思考が再び動き出す。

「って、俺もこんなことしてる場合じゃなかった！」

ウニ頭の少年は、先程の少年の背中を追いかけ、走り出す。

ここは学園都市。人為的に超能力を開発するトンデモない都市。
超能力の開発とは言ったものの、その実六割程度の学生が六段階評価で無能力（つかえない）烙印を押される。

そんな無能力の烙印を押されたある少年は、異能の力『不慮の事故（エンカウンター）』を持ち、ある少年は『幻想殺し（イマジンブレイカー）』を持つ。
それぞれの想いを胸に、少年達の物語は交錯し物語は動き出す。

とある不幸と不慮の事故（後書き）

こんな感じで、正直下手くそですが、それでも暇潰し程度に読んで頂けたら、嬉しいです。

主人公の能力の説明は次回入ると思います。

ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

超電磁砲との遭遇（エンカウント）

驚愕の低クオリティでお届け！文才の無さが際立った出来上がりに全米が涙した（嘘）

そんな感じです。つまんないのでスルーでもぉｋです

それでは本編です

超電磁砲との遭遇（エンカウント）

六月も中旬
入学式から早二ヶ月がたった頃。一年生は新生活に馴れた頃だろうか。
日本列島は無事梅雨入りを果たし、連日の雨も樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）によって“予言”されていたある日の事。

「それでは生徒の皆さん、気を付けて帰るのですー」

一年七組の担任で、学園都市の七不思議の一つ、身長１３５センチ外見十二歳、下手したら園児服にしか見えないピンクの服とピンクの髪が特徴の月詠小萌は帰りのＨＲを終えて生徒達に挨拶していた。

「帰ろうぜ、当麻ってありゃ……居ねぇ」

後ろを振り返ると既にそこには居ない友人の席があった。
しょうがないから一人で帰るかと下駄箱に向かい、外履きのスニーカーに履き替える。

「雨…か」

外に出ると午前中には降っていなかった雨が降っていた。
傘なんて持ってねぇよとため息交じりに呟いて校舎を出る。
目的地をコンビニに決め、歩き出す彼は不思議と濡れていない。

『不慮の事故（エンカウンター）』
ベクトル操作の様でいて本質は全く違う異能の力。
反射膜に触れる事で反射する事が出来る。この力は演算を必要とせ

ず”ダメージと思う”事で反射するという変わった能力である。
そしてこの場合、濡れる事が宗像の中ではダメージと認識しているため雨は進路を変えて宗像に当たることは無い。ただし普通はダメージでは無いものをダメージと思い込むことは常に脳を働かせるため演算しているのと変わらない。

「いらっしゃいませ〜」

「傘は……ゲッ、小さいのしかない」

無い物ねだりしてもしょうがないと小さくため息して傘を手に取る。
実際、寮までまだ少し距離があり能力を使い続けるよりはずっとマシなのだ。

「晩飯でも買ってくか……」

宗像は料理をしない。めんどくさいというのが理由だ。基本カップ麺と外食。

「晩飯、飲み物、じゃがりこっと……は！？　今日は週刊少年ジャンプの発売日では！？」

目的の雑誌を取ろうとしたときフッと横から本が持っていかれた。

「ネガ倉くん！？」

あまりの驚きに楽しみにしていた漫画のタイトルを思わず言ってしまった

『君もジャンプ読むの？　僕、今日初恋の人にそっくりな人が載ってるエロ本見つけて機嫌がいいんだ。だから譲ってあげるね』
「？　ありがとう……？」
『じゃあ本編だと五話くらい後で再会する予定だから、じゃあね』
「とっても危険な香りがしたけどとりあえずありがとう」

学ラン少年を見送って雑誌を取ろうとしたときフッと横から本が持っていかれた。

「デジャヴ！？」

雑誌を持っていった人物を見ると女の子だった。制服からしてお嬢様学校の常盤台中学だと見てとれた。
勝ち誇った顔で宗像を横目に見て立ち読みを始める少女に対して思わずくそガキ……ペッタんこ……などと悪態をつく。

「さっきから聞こえてんだけど」

睨みを利かせ、バチバチと青白い火花を散らす。

「は！？　思考がだだ漏れ！？」

わざと驚いて見せるとさらに火花を散らす少女

「文句があるならハッキリ言いなさいよ」
「……んー」

と一度思案顔をすれば、本人が言ってるいいよねぇと呟き、少女に向き合う。

「じゃあ言わせてもらうけど立ち読みするなら買えよ、あとさっきのしたり顔腹立つわ、ガキかお前は。よく見るとお嬢様っぽいけど中身を外見もガキんちょな、つかまだ反抗期も抜けてないだろ、だいたい俺歳上何だから敬語使えよな？　これだからお嬢様学校に通ってるやつは常識が……」

喋っている最中だったが異変に気付き途中で喋るのを止めその異変に目をやる。

さっきから黙っている少女だったが俯き、微かに震えている。その度肩まで伸びた髪が揺れて電極の様にバチバチと音を鳴らす。

「あ、あの～僕、もう、行きますね」

身の危険を感じて足早にレジに向かおうとする宗像に対して少女は小さく呟く。

「……さいよ……待ちなさいよ！」

言い終わると同時に青白い電撃が宗像目掛けて放たれる。

「え！？　な！？　やめ！！」

咄嗟の事に持っていたカゴでガードした宗像だったが後ろから店員が「お客様？」の一言にゾクリと悪寒が走る。

「や、だって、ちがうの、あれは、あのこが」

指差す方に顔を向けると全身一杯に帯電した少女がズンズンという効果音が聞こえて来そうな足取りで向かってきていた。

「ストップっ！」
陳列台など様々な物に火花を撒き散らしながら宗像に向けて電撃を数発放ってきた。
が、どれも当たることなく四方八方に飛び散る。
「なんでアンタは傷一つ無いのかしら？」
無傷の宗像を見て少女の顔が一気に険しくなる。
「ふざけんなよ……常盤台ってレベル３以上だろ……どうすんだよこれ」
黒コゲになった買い物カゴを会計台の上に置く。
「これあの子に請求してください」
そう言って立ち去ろうとする
「ちょっとアンタどこ行く気！？」
「あ？　かえんだよ……じゃあなガキんちょ」
「な、ちょっと待ちなさいよ！　アンタさっきなにしたの？」
「なんでもいいだろ」
「私と勝負しなさい！」
めんどくせぇなあと言ってから何かを思いつき提案を持ち掛ける。
「俺はレベル０の無能力者何だが……勝負してやるから、もし、俺が負けなかったら飯おごって」

それは年下に集る恥ずべき行為だった。

「いいわよ、豪華絢爛焼き肉セットでもなんでも奢ってあげる……ただし真剣勝負だから」

少女が勝負に拘泥する理由は自分より強いやつが存在するのが許せないからという相手からして見れば超絶的に迷惑な話で宗像にしたって自分の攻撃を止めれた男の実力に興味があっただけ。

宗像は宗像で負ける気はしていないし勝つつもりも無かった。負けなければ勝ち。これで焼き肉は頂き……とか寿司も悪くない……とか呟いている。何せビンボー学生だし、相手はセレブなのだから集ってやろうと思ったワケで。

しかも彼には『不慮の事故』がついているのだから負けることはまず無いだろう。

二人でコンビニを出て河原へ向かう。さすがに店内は迷惑になるからという一般的思考に基づき、場所を変えることになったがもし一般的思考を持ち合わせているなら買い物カゴを黒焦げにはしないだろう。

――――――――――――――――――――

「さっさと始めようぜ」

学区内の外れにある河原。人気もなく実力を十分に発揮できる場所。

「まったく強者の台詞よ、ね！」

言い終わると同時に青白い閃光が宗像目掛けて放たれる。

「……終わり？」

ズボンのポケットに両手を突っ込んでめんどくさそうに言う。宗像の食らう筈のダメージは近くの川の魚に反射……もとい押し付けたので焼け焦げた魚の死体が浮かぶ。

「まだまだ！」

少女の前髪がバチン！　と青白い火花を散らした瞬間、正面から数発、さらに濡れた地面を這う電撃と二正面からの攻撃。だが少女は攻撃の手を緩めない。磁力で地中の砂鉄を操り、剣を形成したあと鞭のように長さが変化し宗像に襲い掛かる。

近くを流れる川には焼け焦げた魚や切り刻まれた魚が無惨にも死肉を晒して水に漂う。

「〜〜♪　え？　終わり？」

少女の目の前にはズボンのポケットに片手を突っ込んで音楽プレーヤーを操作する少年が居た。

「……まだ終わってない！」

少女はスカートのポケットからコインを取り出して親指で真上へ弾き飛ばし、回転しながら再び少女の親指に載る。それを宗像目掛けて打ち出す。

通称　超電磁砲（レールガン）

二本のレールの間に（ｒｙ　（詳しくはＷｉｋｉｐｅｄｉａへ）

とりあえず凄い兵器で普通は艦載兵器として用いられる、が少女はこれを打ち出す事が出来る。と言っても生憎の雨で水が電気分解するため威力が落ちる。それでも十三メートル先の男のを容易に消し飛ばせる威力はあるだろう。

少女から打ち出された超電磁砲は宗像の首から上へオレンジ色の閃光が駆け抜けていく。

頸動脈からは血の噴水として綺麗な紅が間断なく吹き出ていた……

筈だった。

「……うん？　お前は人殺しにでもなるつもりか？」

死んだ筈の男が立っている。

「う、そ……」

言葉を無くす。

「さあ、負けなかったから飯」

これが学園都市第３位と

「そうだな……とりあえず焼き肉で」

宗像清舟との初の遭遇（エンカウント）だった

超電磁砲との遭遇（エンカウント）

絶賛駄文を量産中……つまんないよね、きっと。
もしも文才が千円で売ってたら買いますね、たぶん。いくらやっても上達しないのは許してください。
あとがき長くなりますが不慮の事故の説明を

名前：『不慮の事故（エンカウンター）』
過負荷（マイナス）の能力。反射って言ってるけど受けたダメージを押し付けるのが正確な能力。反射は受けたダメージをそのまま相手に押し付けたから。でも反射膜もあって円カウンター……つまんないね。わかります。
押し付けられるダメージは本人がダメージと思ったら何もかも押し付けられる。雨もそんな感じす。ほかにも心的外傷（トラウマ）や精神抑圧（ストレス）もダメージとして押し付け可能。まだ出来ないけど。

長々とすいませんでした。ほかにも過負荷が登場したらあとがきで紹介する予定です。

ではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）（前書き）

評価ポイントがついている……だと！？
ありがとーございます。さて前回は御坂さんがいきなり私と勝負しなさい！て言ってきましたね。超展開すぎて笑えるｗ
まぁ今回もつまらんですよ、きっと。スルーでもぉｋです。
では本編です

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）

夏休みを目前に控えた七月十六日
樹形図の設計者の“予言（ツリーダイアグラム）”も相変わらずの的中率で「少しは外すくらいの茶目っ気があれば良いのに」と言いたくなる様な陽気の中を一人、銀行へ向かう宗像はそう思っていた。
事の発端はクラスの三バカ（デルタフォース）の一角、土御門の一言からだった———

「そうだ！　ゲーセンに行こう！ぜい」
「京都に行こうみたいなノリで言うなっつの」
「そうやね～今日は身体検査（システムスキャン）で早帰りだから、ええよ」

同じく三バカの一人青髪が土御門の意見に賛同する。

「俺とムナやんと青髪は行くけどカミやんはどうするにゃー？」
「決定事項なのね…」

まだ行くとも言っていないのに勝手に頭数に入れられた宗像だった。隣を見ると青髪が「カップルの男が格ゲーやってるとこに割り込んで無限コンボキメたるぅ」とのたまいていたり、後ろを見れば「どうすっかなぁ」と財布とにらめっこしているウニ頭が居る。そこで気付くことがある。自身の財布の中身。

千三百円

（少し心許無いなあ）

「銀行寄ってくから先いっててて」

「おう」「わかったにゃー」「いってらっしゃい」

――そして現在に到る。

ゲームセンターから目的地のいそべ銀行まではそこまで距離があるわけでは無いが、ほどほどに蒸し暑いなか、厳つい顔のスキルアウト……もとい能力者（レベル２程度）がお決まりの常套句を並べ絡まれて苛立ちを覚え、財布を落としたのも気付かず一路銀行へ向かう宗像だった。

――――――――――――――――――――――――

「不幸だ……」

目的地、いそべ銀行の扉は重く防犯シャッターが閉められ、自らの財布は行方不明……

仕方ないので財布を探しに行こうとしたとき服が引っ張られた。

「ん？」

振り返ると十歳前後だろうか、腰辺りまで伸びた髪とハッキリした目鼻立ちから大人っぽい雰囲気を受けるが身長のせいでまだ子供だとわかった。

「えーと？」

「はい、お財布」

「！！？　お前、これ」

「落ちてたのだ」

「サンキュー！」

財布を受け取り近くのコンビニのＡＴＭに行こうとしたとき少女が声を掛けてきた。

「ちょっと待つのだ！」

「……何？」

「お礼を受け取ってない」

「はぁ」

「たとえばクレープとか最適だと思うのだ」

「それで？」

ため息をついたかと思うと腕を組ながら、これだから最近の若者は……とかいい始めた。実際は宗像の方が歳上だろう。

「お兄ちゃん！」

「うん？」

「これは独り言だから聞き流しても構わないけど良識と良心があるならきっと意図を汲み取ってくれる筈なのだ」

「……めんどくさい」

「めだかは小腹かが空いています。そしてクレープなるものを食べて見たいと言ってみる。」

「無視ですかコンチクショー」

「ついでに言うと向こうの広場になんとクレープ屋さんが！？」

頭を軽く掻いてドナ〇ドも裸足で逃げ出す営業スマイル（０円）を少女に向ける。

「財布を拾ってくれたお嬢さん、お名前は？」

「めだかは黒神って言うんだよ」

「それではめだかお嬢さん、クレープなんて食べませんか？」

「うーん、しょうがないなあ」
「ちくしょう……クソガキ……」
「なんか言った？」
「いんや（ニコ）」

黒神を引き連れて向かいの広場までやって来る。
屋台車両には既に何人か並んでいて近くに止まったバスから五～六歳の子供と保護者がそれに加わる。元々、ｎｅｗ　ｏｐｅｎ　とかでスタンド看板にゲコ太ストラップが先着百名に配られる事もあってかそこそこ列ができ、黒神を連れてその列に並んだ時、後ろから声がした。

「あー！！！」

振り返るとそこに居たのは一ヶ月前から今日まで何かにつけて勝負を挑んでくるあの少女だった。

「……よう」
「なによ、今のタメは！」

内心ではめんどくせぇと思いつつもそれを直接言うとビリビリが飛んでくるので。

「べ、べつにアンタの事なんか、めんどくさいとも、なんとも思ってなんかないんだからね！」
「……」
「いや、露骨に引くのやめて……ところでそちらさんは？」

宗像の指差す方には三人の少女が立っていた。二人は驚き、一人は

精気が抜けた感じで持っていた鞄を落とし、そんな…お姉様が……と呟いて頭に両手を持っていき両膝を地べたにつけ、はあああと言って周囲の視線を集めること必至である。
そんな友人を見かねて甘ったるい声で喋る少女が友人を連れてベンチを取りに行った。

「キミの知り合いって強烈ね」
「……黒子」

そこで残った少女が御坂に話し掛ける。

「あの～、その人御坂さんのお知り合いですか？」
「ん？　俺？　そ、そ、このガキんちょと……」
「わたしには御坂美琴って名前があるっつってんでしょーがッァァ！」
「他にも客が居るんだぞお」

バチン！　と火花を散らす御坂に向けて周囲から冷ややかな視線が送られていた。

「……う」

すると列を詰めるように黒神が話し掛けてくる。

「お兄ちゃん、前」
「あいよ」
「……何その子、アンタに妹なんて居たの？」

黒神を見て御坂が言う。

「何言ってんだ、この人は俺より歳上だぞ？　ちゃんとお酒もたしなめる年齢だし」
「「え！？」」
御坂と少女の顔が凍り付く。勿論嘘……だろう。年齢が分からないのでなんとも言えないが宗像が思い付いたイタズラだ。
「何を言ってるのだ？」
そこで黒神から訂正が入る。
「めだかはまだ生後一年にも満たないのだ」
「は？」
三人が三人疑問符を浮かべる。
「肉体年齢にして十歳前後、培養器から初めて出た時間から千三百時間が経過、日数にして今日は五十五日目に当たるのだ」
トンデモ発言から短い沈黙のあと宗像が話を切り出す。
「……だそうですよ、御坂さん。それでそちらは？」
内心では、とんでもねー引き出し広げてきたぁ！？　と焦っていた。
「え、ええ、こちらは佐天涙子さん」
こちらはこちらで顔がひきつっていた。
「初めまして、佐天涙子です、めだかちゃんと……」

「あ、俺ね…俺は宗像清舟って名前、よろしく、佐天」
「はい、こちらこそよろしくお願いします。よろしくね、めだかちゃん」
「あたしは御坂美琴って言うの。あたしもよろしく」
「うん、よろしくしてやってもいいのだ」

最後上から目線だったが恙無く？　各々自己紹介を終えたところで順番が回ってきた。
手早く会計を済ませて、二人の待つベンチに向かう四人だった。

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）（後書き）

すんません、めだか（小）との遭遇は一回で終わる予定が二分割になってしまいました。あと誤字脱字あるかもです。眠たいなかの作業だったので。これじゃ球磨川さんの予言が……

どうでした？　感想下さい。マジで。あれは凄いですよ、やる気スイッチが勝手に押される感覚ですねw

長くなりましたがこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）２（前書き）

まさかの三部構成ｏｒｚ
しかも量が……ｏｒｚ
そんな感じです。見なくてもぉｋな回。あとがきは無視でお願いします。早く先に進みたいけど学校が……頑張ります。
では本編です。

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）2

「こっちが初春でこっちが白井ね、よろしく二人とも」
「こっちこそよろしくお願いします、宗像さん」
「こちらこそですわ」

先にベンチを取りに行っていた二人にちょうど挨拶を終えた宗像。白井が放心状態から戻るのに一悶着あった。どうやら御坂が男のところに走っていきその相手がなかなか整った顔をしていたため、愛しの自らが姉と慕う人の恋人……なんて早とちりしたため、それを聞いた御坂が「こんなのがあたしの彼氏に見えんのかァ！」と言ったためそれなりに容姿には自信があるため宗像がそれに反論したり、キャンペーンで配られていたゲコ太ストラップを貰えなかった御坂がラストでもらった黒神から譲ってもらったり（ほとんど奪ったに近い）と穏やかだった日常パートは初春の一言を皮切りに一変することになる……

「ほら、お姉様、遠慮なさらず」
「いらないって言ってんでしょ！　何よ、トッピングに納豆と生クリームって！」
「いらないならめだかに食わせろ～」
「ま！　センスの分かる方！　ささ、お姉様も、ほらあーん」

そんな三人……というか御坂を見て初春が佐天に話し掛ける。

「よかったですね」
「え？」
「御坂さん。お嬢様のイメージとはちょっと違ったけど、思ってた

よりずっと親しみやすい人で」
「どうなんだかねえ……」
そんな会話を横で聞いて宗像もそれに加わる。
「アイツはお嬢様なんて高貴な生き物じゃねーよ。初対面の時も勝負しろー！　って」
「えぇ！？」
「そうなんですか！？」
「勿論、勝てる筈無いし、殺されかけたし」
「うわぁ」
「ますますイメージとかけ離れていきます……」
「まぁそんな訳でお嬢様とは対極に位置する生き物だ」
親しみやすいって点では同意するけどな、と言って未だおいかけっこしている三人を見る。
「あれ？　何で昼間から防犯シャッターなんて閉めてるんですかね？」
御坂という人物を再確認してふと、辺りを見ると向かい側の銀行のシャッターが不自然にも閉まっていることに気付き、その場に居る全員に聞こえるように初春が言う。
「そうそう、今日は定休日じゃ……」
宗像が喋りだした次の瞬間、爆音と共に固く閉ざされたシャッターは開かれた。
その場に居る全員が驚きと困惑しているなか一人、自らの鞄の中か

ら腕章を取りだし、同僚に指示を出す少女が居た。
「初春！　警備員（アンチスキル）への連絡と怪我人の有無の確認、急いで下さいな！」
「は、はい！」
「黒子！」
「いけませんわお嬢様、学園都市の治安維持は私たち風紀委員（ジャッジメント）のお仕事…今度こそお行儀よくしていて下さいな」
以前注意されたことを思いだし、そうだったと苦笑する。そんな御坂を見て、宗像が皮肉を言う。
「お行儀悪いの？　“お姉様”？」
「うっさい！」

「ヨッシャ！！　引き上げるぞ！　グズグズすんな！」
「ウス」
銀行から出てきた強盗三人はあらかじめ用意してあった逃走用の車に向かっていた。
「お待ちなさい！」
「！？」
「風紀委員ですの！　器物損壊および強盗の現行犯で拘束します！！」
「嘘ッ！？　何でこんなに早く……ん？」

腕に着けた腕章を見せ付けながら白井は強盗と対峙した、が強盗たちは互いに顔を見合わせる。

「……？」

相手の反応がおかしいことに気付き疑問符を浮かべる白井だったが

「「「ギャハハハハ」」」

突然強盗たちは笑い始め「どんな奴が来たかと思えば」「風紀委員も人手不足かぁ？」

口々にそんなことを言い始めた。確かに中学一年生の女の子かもしれない、がレベル４の能力者であることもまた事実。強盗たちは完全に見くびっていた。

「そこをどきなお嬢ちゃん」

一番大柄の太った男が言う。

「どかないとケガしちゃうぜー！！」

ドスンドスンと巨体が白井に向かって突進していく。

「そういう三下の台詞は――――」

男の腕を躱し、男の足を引っ掛け袖口を引っ張る。すると巨体は空中で一回転し、地面に叩き付けられる。

「――――死亡フラグですわよ」

「さすが」「さすが黒子ね」「意外とやるのな」
傍観していた佐天、御坂、宗像は誇るようだったり感嘆の声だったり、それに見入っていた。

「あれ？　めだかは？」
先程まで一緒に居た筈の黒神が姿を消した事に気付き宗像が二人に聞く。

「あれ？　本当だ……」
「確かに居ないわね……さっきまで一緒に居た筈なんだけど……」

「ダメですって！　今この場を離れたら！」
「でも！」
初春がバスガイドの腕を必死に掴んで止めていた。
「あの……どうかしたんですか？」
その様子を見ていた三人の内、代表して御坂がバスガイドに尋ねる。
「男の子が一人足りないんです！　少し前にバスに忘れ物したっていったきり……」
「えっと…じゃあ、あたしと初春さんと……アンタ、手伝いなさい

よ」
「はぁ？　俺、レベル、0、お分かり？」
厄介事は御免だと言わんばかりに一語一語区切って必死に拒否をアピール。
「アンタあたしより強いから良いの」
アピール失敗。
「不幸だ……」
腑に落ちない様子で言って項垂れていると
「私も手伝います！」
そう言って佐天も協力することになった。
「ういじゃ、探すとしますか」
「そうね、手分けして探しましょ！」

ゴオッ！　とリーダーであろう男の手から赤々と燃え盛る炎が出た。
「発火能力者（パイロキネシスト）……」
「今更後悔しても遅いぞ…お前には消し炭に……」

男が喋っている最中、そんなことはお構い無しといった様子で道路を駆け出す。

「な！？　逃がすかよ！」

突然の事に一瞬驚くも、落ち着いて白井に炎の塊を投げ付ける。

「誰が――――」

弧を描きながら向かってくる炎が当たる直前にテレポートし

「消えた！？」

男の前に一瞬現れて

「――――逃げますの？」

再びテレポートし、ドロップキックを決める。

「だぁ？！」

男は前から倒れその上に降り立つ。そして太ももに仕込んだ鉄矢を服の上からアスファルトに打ち込む。

「テレポーター！？」

「これ以上抵抗するなら次はこれを……」

手に持った鉄矢を見せ付けながら

「体内に直接テレポートさせますわよ？」

「ま、まいった……」

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）2（後書き）

「消えた！？」
男の前に一瞬現れて
「――逃げますの？」
再びテレポートし、ドロップキックを決める。
「あふん？！」
男は前から倒れ、その上に降り立つ。そして太ももに仕込んだ鉄矢を服の上からアスファルトに打ち込む。
「ふん！　当たらなければどうという事はない！！」
「……これ以上抵抗するなら次はこれを」
手に持った鉄矢を見せ付けながら
「体内に直接テレポートさせますわよ？」
「まだだ！　まだ終わらんよ！！」
サクッ
「ギャーーー」

こんなのやですねwなんか寝てないでやってるんでテンションがおかしいんです。すいませんでした。
それではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました。

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）３（前書き）

つまんねぇ…面白くない

では本編です

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）3

「そっちは？」

バスの入り口から顔を出した御坂は車体部分、貨物を載せる後ろの方を捜していた初春に尋ねた。

「ダメですー」

「広場の方にも居なかった」

バスガイドと供に広場を捜しに行った宗像が戻ってきて全員に聞こえるように言う。

「どこ行ったのよ、もう！」

嘆息した様子で言って御坂たちはいなくなった少女と男の子を捜し続ける。

「あ？　何だお前！」

バスのフロント側をしゃがんで捜していた佐天の後ろの方からそんな大声が聞こえてきた。

「……え？」

振り返ると捜していた少女が強盗に連れ去られようとしていた。

「ちょうどいい！　一緒に来い！」

「はわわ！？　何なのだ！？」

「いいから来いって！　早く！」

強引に、無理矢理、力ずくで、少女の腕を掴んで引っ張っていた。そんな場面を目の当たりにした佐天は一瞬、御坂や白井を呼ぼうとしたが、それでは確実に間に合わない、連れ去られてしまうのは目に見えていた。だからこそ、無力な自分を奮い起たせ

（……あたしだって！！）

と心中で覚悟を決めて佐天は走り出した。

「やっぱり広場の方に居るんじゃ……ん？」

いくらバスを探しても見つからず、別の可能性を示唆するように呟いた御坂だったが聞こえてきた怒声によってその思考は掻き消された。

「くそォ！　何だテメェ！　離せよ！」

「ん？」「へ？」

騒ぎ声に宗像も白井も、それに反応する。

「ダメーッ！」
「クソッ！」
強盗は少女の腕を、佐天は体を、必死に掴んで話さなかった。膠着状態は長くは続かず、強盗は人質を諦め、腕を離した瞬間、佐天の顔を蹴り飛ばした。
「……笑えねぇな」
宗像の呟きは、空しく誰にも聞こえない、そんな呟きだった。
「佐天さん！？」
初春は友人のとった行動を見て焦燥感から思わず名前を叫ぶ。
「黒子！！」
ふつふつと湧き上がる怒りを剥き出しにした語勢で後輩の名を呼ぶ御坂。
「え？」
行動を起こそうとした瞬間、名前を呼ばれ戸惑う白井に向けて、相変わらずの語勢のまま続ける。
「こっからは私の個人的なケンカだから…悪いけど、手……出させてもらうわよ」
強盗の乗り込んだ車を睨み付けながら言う。

「あ――…」

最早自分では止められないと判断したため、成り行きを見守ろうと決めた白井。

「おっ思い出した！！」

そこで突っ伏した状態の強盗が話始めた。

「風紀委員には捕まったが最後、心も体も切り刻んで再起不能にする最悪の腹黒テレポーターがいるという噂っ！！」

「誰のことですの？　それ…」

「それだけじゃねえ！」

その少し前、宗像は佐天と黒神の元へやって来ていた。満面の笑みを持参して。

「よっ！　佐天、めだか！」

「……宗像さん」

「……お兄ちゃん」

余りに不釣り合いな笑みに戸惑っている佐天に向き合う。今度は柔らかい笑みで。

「よく頑張ったな……すげぇ格好よかったぜ」

「……そんなこと、ないですよ。あたしなにもできなくて…めだかちゃん守るの精一杯で！」
「んなことねぇよ。レベル5だって、大の大人だってなかなかできることじゃないんだ。勿論、俺にだって出来ない……俺ができること……壊すこと？　いや、台無しにするだけ、か」
「え？」

最後の方だけ聞き取れなかったので聞き直そうとする。

「何でもねえよ。ところで！」

適当にはぐらかして黒神に向き直る。

「お前……勝手に足が動く病気でもあるなら病院行って治してもらえ」
「ん？　病気なんて無いよ？」
「これはあれか？　なんとかには皮肉は通じないって奴か？」
「む～なんかバカにされた気分」
「気のせい、気のせい、…ところでどこ言ってたんだ？　お前」
「男の子の忘れ物探してたのだ」
「……んで、その子は？」
「トイレ」
「はぁ……通りでいくら捜しても見つか「黒子！！」……御坂？」

声がした方を向くと、強盗を睨み付けた御坂が立っていた。

「アイツは……しょうがねえ、あれ、止めてくるわ」

黒神の頭をグシグシと撫でて立ち上がる。

「ったく、アイツと関わるとロクなことがねえ……」

「ちくしょう！　このまま引き下がれっかよ！！」

車に乗り込んだ強盗は車の向きを変え、御坂と対峙した。

「それだけじゃねえ！」

突っ伏した状態の強盗は続ける。

「そのテレポーターを虜にする相方…あの最強の電撃使い（エレクトロマスター）……『超電磁砲』！！」

スカートのポケットからコインを取り出す少女。

「こうなりゃ……テメェらまとめて！」

そんな少女に向けてぼそりと呟く強盗。彼の乗った車の後輪からは蒙蒙と煙が出始めていた。

バチッバチィ！　と体から火花を散らす少女を見た強盗は言葉を洩らす。

「電気…まさか！？」

その問いに答えるように白井は話す……筈だった。

「宗像……さん？」

「街中で艦載兵器ぶっ放つとか頭イカレてるとしか思えないんだけど？　御坂さんよ」

「止めないでくれる？　こんくらいしなきゃ気が済まないんだけど」

話し合う余地無し、か、と宗像は肩を竦めて嘆息する。

「あのなあ、頭にキテるのはお前だけだと思うなよ？」

実際はそんなこと微塵たりとも思っていなかった。そんな前向きな感情は抱いたことは生まれて一度もない。感じることはうざったい。そのくらい。怒りという感情があるならそれすら押し付けて生きてきたのだから。

「こればかりは譲れない……退いて」

立ち塞がる男に射殺さんばかりの視線を向ける。

「そんなもん撃って人殺しにでもなるつもりか？」

「馬鹿にしないで。レベル5になるためにした努力は無駄じゃ無かったって証明してあげるから」

手に持ったコインを弄びながら答える御坂に対して、はぁ、とため息交じりに首を捻る宗像は好きにしろと言って車と御坂の間に立つ。

「……俺も好きにするからな？」

「どうなっても知らないわよ？」

「かまわねぇよ」

半ばめんどくさそうに車と対峙する。

「こりゃ、押し付ける相手間違えたかな……ゲーセンで遊ぶ予定だったのに……不幸だ……」

小さな呟きが唇から洩れたとき前方の車は動きだし、後方からはコインが弾かれる音がした。

「本当に撃つ気かよ……」

オレンジの閃光はその呟きを掻き消し、宗像に直撃した。

が、宗像より先に進むことなく全てがそこで遮断されていた。

「大丈夫、気にすんなよ。不慮の事故だから」

その光景に目を疑う。それを撃った本人も見ていた者も。

「学園都市二三〇万人の頂点、七人しかいないレベル５の第三位『超電磁砲』の一撃を止めた！？」

思わず口を吐いて出た言葉。真実。たった七人しかいないレベル５の代名詞をズボンに片手を突っ込んだ男に止められた事実。

「……どうなってんのよ、アンタの力はァ！！」
「どうもこうも、落ちこぼれの無能りょ」
それは唐突に、宗像は車の車輪に巻き込まれて轢き殺された。
「……え？」
そのままの勢いで御坂に向かっていくが寸でのところで動きが止まる。
フロント部には鮮血が滴り、タイヤにはそのあとがクッキリと残っていた。思考が止まる。
「ねぇ、ちょっと？　嘘でしょ？」
その呼び掛けに反応はない。人だった肉塊。そしてそれは音もなく立ち上がった。
「たとえ理不尽で不条理でそれが流れ弾で虐待であったとしてもそれは『不慮の事故』だから」
有機物の塊が喋りだしたとたん強盗の乗った車はメキメキと音を起てて壊れていく。
「ヒィィィ」
「そんなに驚くことないだろ？　自分が殺した相手の顔くらいよく見とけよ」
強盗は車のドアを開けようと必死になるが、原形を留めていない車のドアは変形し開かなくなっていた。

「気にするな。死のダメージはそこら辺の誰かに押し付けたから、お前は人殺しじゃあねぇよ」
「ちょっとまってよ、それじゃ誰かが死んだことに……」

一度“モノ”になった宗像を嫌悪の表情で見ていた御坂が会話に割り込んでくる。というよりか宗像が一方的にしゃべっているだけなのだが。

「誰だろうな？　もしかしたら知り合い？　この学園都市に居る人間？　はたまたこの国以外の人間？　でも大丈夫、俺がやった訳ではないから」
「そんな……」
「お前だって俺の事殺しただろう？　他人に押し付けるのは心苦しかったけどしょうがないよな？　俺は悪くねぇ」
「そんな無責任な！」
「無意味で無関係な人に押し付けただけだよ、無責任に、な？」
「……腐ってる！」
「なーんて冗談だよ。車とかそこら辺に押し付けただけだっての。そんな怖い顔すんなよ」

未だ嫌悪の表情が見てとれる御坂に対して軽い口調で続ける。

「大丈夫だって。冗談って言ったろ？そんなこと出来ないから。ていうか俺、そんなに悪い奴に見える？」
「……自覚ないんだったらそれはそれで問題ね」
「ひっでぇ言い草だな……それよか」

大破した車の中ですっかり憔悴しきった顔の強盗の方に向いて、ちょうど向こうからやって来た白井を含め二人に言う。

「コイツ、どうすんの？　さすがにこれ以上はビリビリすんなよ？」
「し、しないわよ！　アンタのせいでこの胸のモヤモヤどうしてくれんよ！！」
「わー、白井助けてー、ガキんちょに殺されるー」
「なっ、ちょっと！　近づかないで下さいまし！！」

後日談

強盗三人組は到着したアンチスキルに連行され事件は解決となった。俺たちが捜していた男の子も無事見つかった。佐天の怪我も大したことが無かった。
めだかはいつの間にかいなくなっていた。今度見つけたら説教でも垂れてやろうと思う。
よかった話しばかりではない。何故か、白井に目をつけられ、何故か御坂に勝負を挑まれ、何故か反省文という禍々しくも忌々しいあれをチラつかされ何故か取り調べされた。白井……野郎め！　いや、野郎じゃあ無いんだけど。因みに最終の交通機関が終わって歩いて帰る羽目になった。翌日、学校に行ったらグラサンとエセ関西人に説教食らうし、なんでだ！？

黒髪（黒神）の少女との遭遇（エンカウント）３（後書き）

上手く書けないｏｒｚ
つまらない駄文だなぁ……上達しないし
もーいや（ＴｏＴ）

次回、日常パートで山場無し。そんな感じです。

ではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

風紀委員？との遭遇（前書き）

つまんねぇ…今回下書きしてないし、もう少し時間掛けて書こうかなとか考えている今日この頃だけど、それで何か変わるのかって言われたらわからない。もう少し、あーだこーだやって良くできる、かも。とりあえず今回は駄文です。

駄文なんだぜい！　駄文なのよな！　もしかしなくても駄文かも！

　コンなもンは超駄文だろォが！

そんな感じです。

では本編です。

風紀委員？との遭遇

「おいおいおい、なんだなんだよなんですかぁ？　最近の不良はエスコートの仕方も知らねぇくせにケンカだけは一丁前ってか？」
「お前こそ人数見てケンカ売った方がいいぜぇ？　女の前だからって格好つけんなよ」
「生憎とこっちは人数見て、見て見ぬフリするほど賢くないんでね」
「ふん、まぁいい……こっちは幻想御手で強くなってんだ！　やっちまえ！！」

七月十七日
前日の銀行強盗事件に捲き込まれ約束をすっぽかしたとエセ関西人とシスコン軍曹に怒られた今日もやはりシステムスキャンだった日の事。脳の血管が千切れるくらい気張ったってスプーンは曲がらないしカードに書かれたマークを当てることは出来ない。結果は言うまでもない。ここまできたら逆にレアとかなんとか、担任の先生が言っていた、とそんなことを思い出しつつ昨日の埋め合わせというか今日も暇だったから三バカと遊ぼうとしたら「昨日やり過ぎて下宿先で今日からバイトやねん」と青髪「舞夏（ｒｙ」と土御門「重要なたんぱく質を（ｒｙ」と上条。午後からの予定は宗像を除く全員が埋まっていた。それならと「フリーズドライと冷凍でパーっといきますか」と昼飯にファミレスに行こうと予定を立てて、近道しようと裏道を通ったらいい感じにイカツイお兄さま方が女の子をナンパ、ないしほとんど脅迫に近い事をしていた。

「おい、止めろよ、その子嫌だって言ってんだろ？」

人助け……なんて格好良い事をしようというわけではない。宗像自身、素通りしようとしたが、視線を浴びせられた。それは女の子は勿論、不良も浴びせてくる視線がウザかった。最近はどっかの誰かによってこういう人助けに捲き込まれる事も多かったし人並みの常識でそれを止めに入った。

「なんだよ？　人がオハナシしてるのに邪魔すんなよ、アァン！」

「お話し？　取り囲んで逃げられないようにしてるのがお話しっていうのか、へぇ」

三人組で取り囲むようにして壁際に追い詰めていたそれはやはり恐怖だろう。三人の内、女の子の正面にいた奴が睨みを利かせて怒鳴るようにして宗像に言うが

「なぁ、常識って言葉知ってっか？　状況を考えろよ」

別の奴が言う。三対一さすがに高校生のケンカでこれでは分が悪い。

「人数揃えて女の子ナンパして断れば脅迫まがいが常識か、参考になったよー」

わざと煽って攻撃させようとする。何より手っ取り早いからだ。殴られるないし能力での攻撃をわざと受けて、押し付ける。だから皮肉で相手を煽る。

「テメェ！　調子乗りやがって！　ぶっ殺す！！」

正面にいた一番感情的な奴が食って掛かる！

「おいおいおい、なんだなんだよなんですかぁ？　最近の不良はエスコートの仕方も知らねぇくせにケンカだけは一丁前ってか？」

「お前こそ人数見てケンカ売った方がいいぜぇ？　女の前だからって格好つけんなよ」

別の奴が睨みを利かせて言う。

「生憎とこっちは人数見て、見て見ぬフリするほど賢くないんでね」

やはりそれも皮肉で返す。

「ふん、まぁいい……こっちは幻想御手で強くなってんだ！　やっちまえ！！」

「何人だろうが俺に勝つのは百年早い！」

「随分と長生きね？」

黒く焼け焦げた相手を見下ろしながら決め台詞を言うと、背中から茶化された。

「そうじゃないだろ！　……、って御坂？」

その声に突っ込みを入れて振り返るとそこにいたのは風紀委員の腕章を着けた御坂美琴その人だった。

「なにやってんの？　お前ジャッジメントじゃないだろ」

「あー、まぁ、いろいろとね。それより、凄い音してたけどなんかあったの？」

「ああ、これ」

指の先には焼け焦げた三人組が倒れていた。

「なにこれ？」

「人」

「わかるけど！　何があったか聞いてるの」

「焼けた」

「そうでしょうね！　なんで」

「炎で」

「あー！　もう！　どうしてこんな状況なのか説明してくれる！？」

「やだ」

バチンと火花が散る。

「イヤン、そんなもん食らったら死ぬわ、とりあえずめんどいからやだ」

「それだったら私から説明します」

「あなたは？」

助けた少女が事情を説明、何となく理解して御坂は去っていった。去り際に鞄を知らないかと宗像と少女に質問していた。子供用のピンクのバック。花の柄が入った。勿論、そんなものは見てないと答

えて少女に別れを告げていざファミレスへ向かう宗像だった。

「ふぃー、食った食った。それなりだったかな」

昼飯の感想を述べて来た道を戻ろうとしたときふと茶色いアイツが目の端を通りすぎた。

「コーギー？」

種類はどうでもよかった。問題はそこじゃない。

「ピンクかったよな？　あれ」

言うが早いか、足は既に動き出していた。

「大概、お人好しだよな、俺も……」

走りながら呟いて、四足歩行のアイツを捕まえようとしたときアイツは走り出した。

「はぁ？！　犬が本気で走って追い付けんのか、これ。つかあっちのほうって児童公園の方だよな」

犬を追って走るが食後の運動にしてはいかんせんハードすぎる。脇腹を押さえながら犬が走り去った方に曲がると、やはりそこには児童公園があった。

「はぁ、はぁ、み、見失った……いつつ」

公園に入るとブランコや滑り台、砂場、噴水など普通の公園があった。

児童公園と言うだけあって、子供の姿もそれなりにあった。

「なぁ、犬みなかった？　ピンクのバックくわえた」

「んーん」「みてないよー」「しらなーい」「だれー？」

近くにいた子供に聞いてみても見てない。となると……どこだ？

と思考し始めたその時

「くらえ！　カンチョー！」

「あぐ！？　ちょ、だれだ！　いま浣腸したやつ！」

振り返ると男の子が両手を合わせてな中指と人差し指を立ててそこにさながら銃を射ったガンマンの様に息を吹いていた。

「ひゃっぱつひゃくちゅうぅー」

「お前か？　覚悟はいい……」

「エイ！」

「はぐぅ？！」

しゃべっている最中、今度は別の子供がみぞおちにパンチを。

「いい度胸してんなぁ？　ええ？」

「にげろぉー」「わぁー」「おにごっこだー」

何故か成り行きで鬼ごっこになった。適当に子供に制裁を加えて鬼

ごっこの続きをしていたら一つの視線が宗像に送られていた。

「……？」
「……」
「……（キョロキョロ）」
「……」
「……！！！」
「やっと気づいた？」
「……御坂か……よう」
「さっきから何してんの？」
「何ってそりゃ……犬探してんだよ」
「どこが！？　ねぇ、それどこが！？」
「うるさい、それよりお前後ろ」

後ろを振り返るとやはり御坂にも子供、主に女の子が集まっていた。

「ふうきいいんのおねえちゃん」「ときわだいちゅうがくのせいふくだー」「おじょうさまなんだー」
「うわぁ！？」
「なんでこんなのはいてんだぁ？」「しらねぇ、おじょうさまだからじゃね？」

近くにいた男の子が御坂のスカートをめくる。みるみる顔は上気し、赤くなる。

「はっはっは、ノーパンかもな」
「な！？　そんなわけないでしょ！　この下に履いてるわよ！」
「冗談も通じないのか？　ノーパンジャッジメントさんよ」
「ア、アンタはー！！」

怒りで顔を真っ赤にしていた御坂だったが一人の子供の一声でそれは一気になくなる。

「あー犬だー」

「！」

「！」

その一言に二人は一斉に動き出す。

「固法先輩！」

そう言うと茂みを捜していたもう一人のジャッジメントが前を通った犬を捕まえようとする。

「！　まちなさ……きゃあ！？」

転んだ。

「任せてください！」

その前を御坂と宗像が通りすぎる。

「ジャッジメント……もう少し頑張れ、よ！」

そう言って走るスピードをあげる。今は脇腹が痛むことは無い。御坂との距離と犬との距離が変わる。

（速い！）

「仕方ない！」

バチバチ！　と音がすると前にあった電灯が耳障りな音を立てて爆発する。

「おーらよっと！」

その音に犬が一瞬驚いた隙に宗像が飛びかかる。

「やったな御…坂って……ねぇよ！！？」

“犬”は捕まえた。問題はその犬がバックを持っているか否か。結論は持っていない。何故だろうと考え始める前に声がした。

「上ー！」

転んだもう一人のジャッジメントの人だった。言われた通り見上げると、噴水に向かって飛んでいくバックが目に入った。

「ちょ、無理」

「うそぉ！？」

「御坂！」

「ええい！　なめんなぁ――」

犬を抱えている宗像にそれを追うことは不可能。直ぐに御坂に呼び掛けると、御坂は自身に電磁加速を加えて走力を上げる。必死に腕を伸ばし、噴水に突っ込んでいく。

ドポン！

何かが水に落ちる音。

「御坂さん！」
「――目標、無事ゲット」
御坂の手にはバックをしっかりと捕まれていた。
「ご苦労様、お手柄ね」
そう言うと御坂から鞄を掴み取る。
「ちょ！　そんな雑に扱っていいんですか！？　爆発物処理班とか呼ばないと……」
「爆発物？」

＊

既に夕暮れ時を迎えつつある頭上には赤みを帯びた空が広がっていた。

「はい、もう無くしちゃダメよ？」

バックの持ち主であろう女の子にそれが渡される。

「うん！」

受け取った少女の顔には笑顔が浮かんでいた。それを見て渡したジャッジメントの彼女は静かに微笑んだ。

「お疲れさまでしたー」

「さすがは固法さんですの」

バックの持ち主を連れてきた二人のジャッジメントは固法と呼ばれた人物に話しかけた。

「見つけたのは、私じゃ無いんだけどね」

どこか苦笑した様子で言う固法はベンチの方を見る。

「え？」

「へ？」

二人の声が重なる。二人は二人とも、じゃあ誰が見つけたのか、という考えはベンチに座っていた人物を見て直ぐに切り替わる。

「お姉様！？　と宗像さん！？」

「御坂さん！？　と宗像さん！？」

再び重なった声の通りベンチに座っていたのは御坂と宗像だった。

「あら？　あなたたち御坂さんと彼と知り合い？」
そこに固法が割って入ってくる。
「知ってるも何も……」
「御坂美琴さん。常盤台中学の」
「御坂…美琴……ってあの『超電磁砲』？！　じゃあ彼は？」
さすが学園都市、第三位の名前は知れ渡っていた。がレベル０の一学生の名前は知るはず無いので二人に質問する。
「彼はちょっとした知り合いですわ」
「昨日の事件で色々と……」
「ふーん、そうなんだ」
「ところでなんで御坂さんと宗像さんが？」
「しかも、お姉様はヌレヌレのグチャグチャに……」
固法は二人に経緯を話す。爆弾だとか、その他もろもろ宗像も含めて。
三人は大儀そうにあくびしている宗像とどこか落ち込んでいる御坂達の方を見る。
「ん？　初春と……白井だ」
「こんにちはー」
「ごきげんよう、宗像さん」
「昨日の今日で……なかなかいい神経してるよ、お前」
「それは誉め言葉として受け取っておきますわ。ところでお姉様！」
やいのやいの言われている御坂を横目に一人の少女が初春に付き添われて宗像と御坂の前にやって来た。

一度初春に確認するように顔を見る。初春もそれに笑ってうなずいた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう！」

「あの、えっとその」

微かに赤くなった御坂だったがそれに応える

「ど、どういたしまして」

「うん！」

「大切にしろよ？」

「わかった！」

ベンチから立ち上がり女の子の頭を軽く撫でる。

「じゃあ帰るわ」

「ちょっと待って、お礼を」

「止めてくださいよ、そんなのが欲しくてやってる訳じゃあないんですから」

「……地味にいい台詞ですわね、それ」

「だろ？　実際いらないし、帰る」

「……宗像さん、ジャッジメントに入りません？」

「白井からのお誘いか……魅力的だけどお断りしとく、性に合わない」

「あら残念ですわ、いつでもお待ちしていますのよ」

「ん、じゃあ適当に」

御坂たちに軽く手を振って家路に着く。

「結局人助けばっかだったな……何やってんだろ、俺……」

そんな呟きが唇から洩れた事は誰も気付かなかった。

風紀委員？との遭遇（後書き）

ね？つまらないでしょ？
だから言ったのに。次回から時間掛けて書きます。二週間くらい掛けてみて余り変わらなかったら適当にぱっぱと書き上げます。とりあえず今回は駄文です。もっとおもしろく書けないかなぁ……悲痛な悩みです。

ではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

虚空爆破事件との遭遇～前編～（前書き）

性懲りもなくまた書きました。ただ下手くそなのは相変わらず……
面白く書きたいな（ＴｏＴ）
まぁ、こんなもんで
では本編です

虚空爆破事件との遭遇～前編～

「爆弾？」

高い外壁に囲まれた街のなかをドラム缶型の警備ロボットが巡回し安全に配慮されている学園都市に聞き慣れない単語を使用した事件が発生していた。そしてその不穏な言葉はやはりそこの学生、宗像の口から出たもの。

「そうだにゃー、たとえば……」

そう言って、土御門は宗像の手にした缶ジュースを指差す。

「アルミ？」

「そう、コイツを基点にして重量子の数ではなく速度を急激に増加させて周囲に撒き散らす」

説明の最中も片手に持ったジュースをそのまま一気に処理してしまう。処理の最中でも聞き耳をたてるのを忘れずに。

「おっかねーな、それ。だから爆弾なのか」

言いながら持っていた空になった缶をドラム缶の前に投げ捨てる。一瞬でゴミを吸い込み街を清潔に保つドラム缶。うん、便利だ。

「そうそう、簡単に言えば『アルミを爆弾に』だからにゃー」

そのまま聞いた話を話す金髪のグラサン野郎。本当かどうかわからない飄々とした様子で続ける。

「まったく、物騒な世の中だにゃー」
「本当になー」
そんな様子なのでこちらも適当に合わせる。
「……で、それ、何の話？」
そこで宗像と土御門の話を神妙な顔で聞いていた上条が口を開く。
「んー、アルミを見たら投げ捨てましょうって話」
「ムナやん、それちょっと――――ていうか大分違うぜい？」
「そうか？　まぁ、気を付けろってこと」
「ふーん」
そんな朝の登校風景に一つ、異変が生じた。
「ひッ？」
「人にブツかっといて謝罪もなしかよ？」
三人の前を歩く少年が目の前の不良と肩がぶつかったのだ。不良は少年の頭を掴んで壁際に寄せる。
「え？　だってそっちがぶつかって…」
少年が反論しようと喋り始めたとき、不良の拳が少年の顔に入った。
それを見て動き出した者がいた。
「野郎！」
「当麻、もう大丈夫だ、ジャッジメントがもう来てるから……」

「熱くなるのは禁物だぜい？　カミやん」
「……そう、だよな。大丈夫」
「ん、俺らも行こうぜ？」
「ああ」

誰が見ても相手が悪いことがわかる。だから尚更、正義感の強い上条は動こうとした。それもジャッジメントの到着により、お株を奪われた形になってしまったのだが。

「こらそこっ何してる！」
「おい、ジャッジメントだぜ」

一部始終を見て駆けつけたジャッジメントが止めに入る。

「っせーな、何でもねーよ」

そう言って少年を殴り飛ばした不良二人は立ち去っていった。

「もっと早く来いよ」

少年の口から言葉が洩れる。その言葉にはどこか、憎悪の様な感情が込められていた。が小さな呟きにそれを感じとるものはいない。

「？　何か言ったかい？」
「別に…」

踵を返し、歩いていく少年を見送り、三人とジャッジメントは日常に戻る。

こうして朝の出来事は幕を閉じた。

―――――――――――
―――――――――
―――

「んー、終わったぁ」

帰りのＨＲを終えて背伸びする。そして後ろの席に座った少年に呼び掛ける。

「けぇるべぇよ、当麻」
「そうだな、土御門は？」

呼ばれた本人は既に鞄を手に立ち上がっていた。

「すまんにゃー、二人とも。今日はちょっと用事が……」
「ふーん、青髪は？」

やはりこちらも鞄を手に立ち上がっていた。

「スマンねぇ、カミやん、ムナやん。今日もバイトやねん」
「しゃーねぇ、二人で帰るか……つかゾッとしねぇな、これ」
「なにが？」
「何でもねーよ」

なにが楽しくて男二人で帰るのかと。どうせなら若い男女二人で放課後デート……なんて思っていても口にしない。
鞄を脇に挟んでポケットに手を突っ込んで落ちないように抱える。

そして乗降口に向けて歩き出す。

「暇だな……どっか寄ってく？」

「上条さんはあんまりお金ありませんのことよ？」

「そりゃあ失礼つかまつりました」

スニーカーに履き替え校舎を出る。

午後の予定を話しながら、ボチボチと歩き始める。とりあえず飯を寮に戻って食ってとか何とか言っていたときふと二人に声が掛けられた。

「おにーちゃん、おにーちゃん」

「ん？」

「あ？」

振り返るとピンク色の花柄の模様の子供用のバックを携えた、やはり子供が立っていた。

「あー、……昨日の？」

「うん、それで、あのね……」

どうやら洋服店を探している最中だったらしい。詳しい場所が分からず困っていたとき、見知った顔を見つけたため声を掛けたとのこと。

「よーし、兄ちゃんに任せろ！」

何故か上条が張り切っていた。

「なんかこんなんばっかだな、おい」

「ん、困っている人を見たら助けてやろうぜ？」
「……さすが自称偽善使い（フォックスワード）だよ」
はぁ、とため息一つ吐いて頭の中で洋服店への最短ルートを探す。
「Ｓｅｖｅｎｔｈｍｉｓｔだったよな？　じゃああっちからが近いぞ」
「よっしゃ、行こーう」
「おー」
上条のノリに少女も合わせる。そして残るは
「そのノリを俺に求めてると？」
「……（ジロジロ）」
「……おー」
「よし行こう」
「なんつーか、不幸だ」

――――――――
――――――――
――――

「やっぱりでかいな、ここ」
と宗像が店内を見回して。

「確かになあ、あんまり来ないからわかんねえよ」
「だからっておんなじ柄の服ばかり買うなよ……」
とかダベりつつエスカレーターに乗って上の階へ行く。
そこにはレディースものの商品を扱っている店舗が多く、下着やら何やらがあった。
「こっちこっち」
目的の洋服店を見つけたようで少しはしゃいでいる少女。
「へいへい」
それを尻目に大儀そうにあくびをしながらついていく宗像と少女と手を繋いだ上条。
「ロリコン属性かっつの」
そう呟いた宗像の目の端に最近では見慣れたグレーのプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターのアイツがいた。
「どうした、宗像？」
「いや、あれがね……」
宗像の指の先にいた挙動不審なアイツを見てやって来た上条はため息一つ。
「脅かしてやるか」
「注意だろ、ったく」
「変わりねえよ」

鏡の前で手に持ったいかにも子供受けしそうなピンク色のパジャマを合わせて恍惚の表情だった御坂は一気に顔が引きつった。

「何やってんだ、オマエ」

「常盤台のお嬢様は子供っぽい趣味をお持ちで？」

鏡越しに突き刺さる二人の視線。

「――――ッ？――――ッ！？」

「言葉喋れ、言葉を」

面白いものを見つけたと言わんばかりの笑顔で言う宗像。

「な　な　何でアンタたちがこんな所にいんのよっ！！」

と真っ赤に上気した顔で御坂が。

「いちゃわりぃんかよ――――」

「いちゃいけないのかよ――――」

とほとんど同時の台詞に少女が入ってくる。

「おにーちゃーん」

上条と手を繋いでいたあの少女。

「このおようふく…」

ワンピースを持って駆けてくる少女は御坂に気付く。

「あ、トキワダイのおねーちゃんだ」
「昨日のカバンの子……」
御坂の方も見覚えがあったのか鞄の件を思い出す。が別の事に頭が行く。
「お兄ちゃんって…アンタ妹いたの？」
勿論、上条に向けての質問。宗像とは昨日知り合ったのを知っているから。
「オレらはこの子が洋服店探してるって言うから案内しただけだ」
「ま、そんなとこだな」
ふーん、と適当に相槌を打つと今度は少女が。
「あのね、オシャレなひとはここにくるってテレビでいってたの」
「そうなんだ」
先程とは打って変わって、急にお姉さんの様な物腰で話す御坂だったが、
「まあそれはさておき」
「「？」」
「どっちか私と勝負しなさいよ！」
とても残念な子だった。
「オマエの頭ん中はそれしかないのか」

半ば以上呆れた様子で言う上条。

「いくらなんでも子供の前だぜ？　ちったあ場所とか状況考えろよ」

こちらも呆れた様子で言う。

「うっ」

さすがにその通りと黙ってしまう。

「文句があるならすぐ視界から消えてやるから」

入り口ん所にいるからな、と少女に言って、二人で歩いていく。

「あそこまで見境ないか？　普通」

「昨日も大変だった……」

「そりゃ御愁傷様」

後ろ姿を見送ってから少女に「なかよくしなきゃダメだよ？」と言われた御坂だった。

「どうかしたんですか？」

そしてそんな御坂に一緒に来て、別の商品を見に行って戻ってきた佐天と初春。

「……別に」

心なしか反省の色が見える。

「私、ちょっとはずすわね」
そう言って婦人化粧室に向かった。

――――――――
――――――
――――

（我ながら見境ないなあ）

ハンカチをくわえながらそう口の中で呟く。
手を拭きながら化粧室を出て通路を歩く。

「どうもアイツらが相手だと調子狂うのよね…ん？」
階段を歩く人物の手にはカエルの人形が抱えられていた。

「！！」
（ゲコ太？）

思わずネコ目になるくらい執心のカエルのマスコットと見受けられたが、

（…じゃないか。つーか全く似てないわ）

それは恐ろしく似ていなかった。

（でもあの人あんなとこでぬいぐるみ持って何やってんだろ？）

がそれも一瞬で切り替えて通路を歩いていく。

「あれ？　あの子は？」

通路を曲がると佐天と初春の姿が。が先程一緒にいた少女がいないことに気づき、御坂が佐天に尋ねる。

「あの子もお手洗いに…行き違いになったみたいですね」

とその時初春の携帯が鳴った。

「はいもしも…」

『初春ッ！！！』

それは風紀委員の同僚、白井の怒鳴り声だった。

『今どこにいるんですのっ！！？』

携帯を耳から離しても聞こえるような怒鳴り声だった。

そして文字通り耳から携帯を離す初春。

「しっ…白井さん！？　えっと現在警邏中でありまして決してサボってる訳では…」

結論からいうとサボりだった。が意に介さず白井は続ける。

『例の虚空爆破（グラビトン）事件の続報ですの！』
「え！？」
『衛星が重量子の爆発的加速を観測しましてよ』
「か　観測地点は？」
ただ事ではない様子に疑問符を浮かべる御坂と佐天。
『今　近くにジャッジメントを急行させていますの』
『あなたも速やかに現場に向かいなさい』
「ですから観測地点っ…」
『第七学区の洋服店『Ｓｅｖｅｎｔｈｍｉｓｔ』ですの！』

虚空爆破事件との遭遇～前編～（後書き）

うーん、下手くそだなあ……
上達しないかなあ……
まあ、頑張って書いていきます。
次回も適当に時間かけて書きます。
目標は早く上手に！　ですね。

ではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

虚空爆破事件との遭遇～中編～（前書き）

心理模写下手くそ。上達なし。
そおいえばスマホから投稿してるんです。パソコンから投稿ってなってますが。ＩＳ０３です。どーでもいいね。はい。

では本編です

虚空爆破事件との遭遇～中編～

衛星が重量子の爆発的加速を観測する数分前……

「やっぱり場所も時間も関連性が認められませんわね……」

ジャッジメントの一七七支部のパソコンの前でため息交じりに呟く白井。

「もう少し手掛かりがあれば容疑者の絞り込みもできますのに～」

もう幾度となく見た『書庫（バンク）』に記載された『量子変速（シンクロトロン）』の能力者のページをスクロールさせながら。

釧路帷子　ｌｅｖｅｌ４
Ｅｔｃ．
介旅初矢　ｌｅｖｅｌ２
Ｅｔｃ．

学園都市で多発している虚空爆破事件が起こせる、いわば容疑者リストの様なもの。
が、アルミを爆弾に変えるほどの能力となると大能力者……すなわちレベル４以上の能力者である事が条件になる。
そして学園都市にはたった一人だけ『量子変速』でレベル４の学生がいることがわかっていた。ならば彼女こそが犯人で事件解決となるはずだった。

ところが釧路帷子は連日の事件発生の前日、原因不明の昏睡状態に陥っていて、犯行は不可能。

ならば誰が？　どういった目的で？　次のターゲットは？　次は何時？

解の出ない問題が頭の中をぐるぐると回り続ける。

が、やはり解は出そうにない。

ならばと別の考えを巡らす。

『書庫』のデータに不備がある。前回の身体検査後の短期間で急激に能力を身につけた。全く別の異能の力。

『書庫』のデータに不備があるか否かについては限りなく無いといっても過言ではない。短期間で急激に能力を身につけるについても、あまりに稀なケースである。最後に異能の力について。確かにバンクのデータにはレベル０だった。が、白井の知る人物に、学園都市最強のレベル５の攻撃をズボンに片手を入れた状態で容易く止める男がいる。かといってあんな化け物じみた能力者がゴロゴロいるはずもなく、どれも可能性は低いものだった。

一向に進展しない状況に苛立つことすら疲れて机に突っ伏してしまう。

「遺留品を読心能力（サイコメトリー）で調べさせても何も出ませんし……」

愚痴にもぼやきにも聞こえる白井の呟き。そしてそれは事件解決の糸口となる。

「同僚が九人も負傷しているというのに…何か……」

不審な点。普通ではあり得ない、おかしな点。無意識の内、自分自身の言葉をもう一度口の中で呟く。

「九人！？」

一般人の負傷者零人に対して風紀委員の負傷者が九人。異常な数。まるで最初からそれだけを狙っていたかのような。

「いくらなんでも多すぎません？」

連続虚空爆破事件の概要が書かれたパソコンの画面を食い入る様に見つめていたとき、

「――――…！？　警報？　まさか！？」

支部に設置された警報が部屋に鳴り響く。それは同時に事件発生直前を意味する。

（こんな大事な時にどこにほっつき歩いているんですの！）

本来いるべき同僚に変わり、近くの支部に連絡し、事件発生場所周辺をパトロールしていたジャッジメントに急行するよう連絡をする。そして残るは今もどこかほっつき歩いている同僚を現場に向かわせること、自身も報告にあった洋服店に向かうこと。

プルルルルル、プルルルルル

なかなか電話が繋がらなく、握っている拳に思わず力が籠る。

（早く出なさい！　文句はあとでたっぷり言うとして、今回ばかりは怪我人だけでは済まないはずですわ……）

日に日に上がる爆発の威力。それも警戒心を削ぐような子供用の鞄

等に入れて、えげつない犯行なのだ。一般人を巻き込むような事だけは避けたい。一刻を要する状況に白井の苛立ちは募る。

『はいもしも…』

「初春ッ！！！」

ようやく繋がった！　焦慮の念で思わず声がでかくなってしまう。けれど今は構っている暇などない。語勢そのまま続ける。

「今どこにいるんですのっ！！？」

『しっ…白井さん！？　えっと現在警邏中でありまして決してサボってる訳では…』

電話越しに初春の声がゴニョゴニョと聞こえる。大方、サボっていたのだろう。あとでどうなるかは決定的になったところで現在の状況は変わらない。忘却しないように頭の片隅に置いておいて、説明を続ける。

「例の虚空爆破事件の続報ですの！」

『えっ！？』

「衛星が重量子の爆発的加速を観測しましてよ」

『か　観測地点は？』

「今　近くのジャッジメントを急行させていますの。あなたも速やかに現場に向かいなさい」

『ですから観測地点っ…』

「第七学区にある洋服店『Ｓｅｖｅｎｔｈｍｉｓｔ』ですの！」

一呼吸のあと、

『ラッキーです　私、今ちょうどそこにいますっ！！』

驚愕。それが事実なら犯人の狙いは最初から……
自分の息が詰まったような気がした。一瞬言葉が詰まって、そして絞り出す。

「何ですって！？　初は…！！」

電話越しに聞こえる御坂さんと呼ぶ声。

「初春！　聞きなさい！」

その呼び掛けに返答はない。
次第に聞こえてくる館内アナウンスの声。多分一般客を退避させているのだろう。しばらくすると静かになった様だった。いまなら返答があるかも知れない。必死に電話に向けて声を張り上げる。

「初春ッ！！　初春！！　聞きなさい！」
『今　全員避難したか確認を…』

ようやく届いた！　怒鳴り付ける様に喋る。いまならまだ間に合うかもしれない。先程以上の焦燥が一瞬引いた様な気がした。

「今すぐそこを離れなさい！！！」

電話越しに唾を飲む音が聞こえた。

「過去八件の事件全てでジャッジメントが負傷していますのっ！！
犯人の真の狙いは……」

額に浮かぶ嫌な汗を拭いながら、

「観測地点周辺にいるジャッジメント！！！」

そして告げる。犯人の狙いを。

「今回のターゲットはあなたですのよ、初春っ！！」

息を飲む一瞬の間。沈黙。短い沈黙のあとガシャンと携帯電話が落ちる耳障りな音がした。

同時に聞こえてくる同僚の声。怒鳴り声。いちばん避けたかった事が落ちた電話越しに聞こえてくる。

『逃げてください！！』

その一声に全身悪寒が走る。まさかと、思う前に、

『あれが爆弾ですっ！！！』

嫌な汗が吹き出る。間に合わなかった。そんなことを悔いる前に、ドン、と爆音がしてブツンと無機質な音がした。あとにツー、ツー、と電話が切れた音が聞こえる。

白井の脚はその音を聞く前に既に動き出していた。何があったのか、同僚の安否を確かめるために。

――――――――

――――――
――――

七月十八日
とある少年の一日。

朝、彼は不良二人の内、一人と肩がぶつかった。勿論、ぶつからないよう避けて歩こうとした。
しかし二人は二人は道の中央を歩き避けようともしない。そして肩がぶつかった。ジャッジメントは最初から見ていた。見ていた。
けれど、彼が殴られるまで動こうとしなかった。誰がどう見ても弱いもの苛めのように写ったら筈なのに。止めようとしない。
少年は思う。僕を。僕を守らない。助けない。救わない。そんな無能は要らないと。
少年の口から洩れる呟き。

「もっと早く来いよ」

その言葉の裏に隠された想いを知るものはいない。
そして学校では……

「よう」

少年はその声に肩をビクンと震わせる。

「またちっと、金貸してくんね？」

少年の同級生三人。特に仲が良いわけでもない。当然、お金を貸し借りする仲でもない。

「え…でも、こ　こないだ貸した分も…まだ返してもらってない、よね」

人気のない校舎の裏。少年と二人はそこにいた。
ゴッ、ガスッと有機物、もっと言えば肉を殴る音。
そんな音が校舎裏に空しく、小さい音で反響する。

「ちゃんと返すって言ってんだろ？　出世払いでさ――」

一人が顔中傷だらけの少年の顔を踏みつけながら言う。

「だいたい無期限無利息無制限がオマエのウリだろ～？」

もう一人はそんな光景を見ようともしない。むしろ誰か来ないか警戒しているよう。
そして少年から取り上げた財布からお札を抜き取る。

「ちっ、これっぽっちか」
「小銭は残しといてやんよ」

そう言って財布を放り投げる。

「よ――――す」
「そっちはどうだった？」

残る一人が戻ってきた。

「楽勝楽勝」

その一人も少年に見向きもしない。

「廊下水浸しにしただけでジャッジメントのヤツら総出で片付けだしてさ」

然も、誇るように。自分がしたことを。

「アーハッハッ」

二人は笑う。実に、愉快だと。

「見回り後回しにしてお掃除か」

「アイツら本当頭カテーよなあ」

「頭固いからジャッジメントなんかやってんだろ」

「あそっか」

そんな下らない、どうしょうもない会話をしながら、三人は去って行く。

（クソがっ）

ボロボロで、

（何やってんだよっ！！）

フラフラで、

（掃除する所が違うだろ！！）

そんな状況で、

（無能力者がこの僕に暴力を振るってんだぞ）

誰にも届かない、

（何がジャッジメントだ）

誰にも聞こえない、

（オマエラが無能だから僕がこんな目に遭うんだ）

誰にも響かない、

（気付けよ…！！）

少年の、心の、心からの声。

虚空爆破事件との遭遇～中編～（後書き）

モバゲーやってるんですよね、特に怪盗。
あ、別に書くことが無いから近況を書いている訳では無いですよ？
んー、ばらかもん四巻買いに行かなきゃ……
本当に書くことが無いから近況を書いている訳では無いですよ？
マジで。

眠たくてテンションがおかしいんです。長々とすいませんでした。

ではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

それが出来ないのなら――――（前書き）

これかはタイトルをセリフやモノローグ？　だっけかな　？
とりあえずめだかっぽくいこうと思います。
ただそりだけ

では本編です

それが出来ないのなら――

〜　Ｓｅｖｅｎｔｈｍｉｓｔ入り口付近　〜

「ん？　館内アナウンス？」

突然流れ出した館内アナウンス。

『……電機系統のトラブルにより、本日の営業を終了させていただきます』

「トラブル？　とりあえず出ようぜ、当麻」

「そうだな…あれ？　そう言えばあの女の子は？」

「外に出てからあのガキんちょ……御坂探せばいいだろ。一緒に居た筈だったろ？」

「ああ、それもそうだな」

店外に出て御坂たちを捜す。

次々に出てくる一般客に混じって出てきてないか捜すが人の多さに確認が追い付かなかった。

出てきた人に話をすると、中で誘導を行っている常盤台の子とジャッジメントが残っている話を聞けた。

「なにやってんだアイツ」

「ジャッジメントに協力してんだろ？　レベル５だし」

―――――――――――
―――――――――
―――

「ビリビリっ」

上条の声が人気の感じられない店内に響いた。
その声にその場に居た二人が気付く。

「あの子は？」
「は？　まだ戻ってなかったの？」

その問いかけに宗像が答える。

「いや、俺たちはてっきりお前たちといっしょいるもんだと……」

それを聞いて初春はギョッとする。もしそれが本当ならば、女の子が店内にいる状態で爆発してしまえば怪我だけでは済まされないだろう。ガランとした店内を見回していると、今だ繋がったままの携帯から同僚の声がした。

『初春ッ！！　初春！！　聞きなさい！』
「今、全員避難したか確認を…」

同僚の声に焦りの様な感情が聞き取れた。が、とりあえず現状の報

告をしておく。
これでも一応ジャッジメントなのだ。デスクワークばかりが能ではないと。

『今すぐそこを離れなさい！！！』

だが電話越しに聞こえる声に余裕はなく、切羽詰まった様な声色をしていた。

『過去八件の事件全てでジャッジメントが負傷してますのっ！！
犯人の真の狙いは』

ここまで聞いて何となくわかった。

『観測地点周辺にいるジャッジメント！！！』

でも本当にそんなことが……

『今回のターゲットはあなたですのよ、初春っ！！』

だとしたら、皆と出来るだけ離れなきゃ。巻き込むわけにはいけない。
だが、初春の思考は一気に別のものへと変わる。

「おねーちゃーん」

パタパタと駆け寄る女の子。無邪気に笑う女の子の手には、お世辞来も可愛いとは言えないカエルのぬいぐるみが。

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

女の子を見て宗像、上条は女の子の無事な姿に安堵する。
しかし御坂は眉をひそめ、カエルのぬいぐるみを見つめていた。

（あれはさっきの……？）

見覚えのあるぬいぐるみに首をひねる。
そして初春は、今にもそれを受け取ろうとしていた。

「ッ！！？」

が、ぬいぐるみは、ブン、と聞いたことのない音を立ててぬいぐるみの中心に異質な空間を作り上げた。
携帯は手から滑り落ち、ガシャンと音を立てる。
女の子からぬいぐるみを、半ば奪い取るようにして後方へ投げる。

「逃げてください！！」

言いながら女の子に危険が及ばないように自らが盾になるよう抱き抱える。

「あれが爆弾ですっ！！！」

その声に三人はぬいぐるみに視線を向ける。
三人の視線の先にはメキメキと音を上げて形をなくすぬいぐるみがあった。

（レールガンで爆弾ごと吹き飛ばすッ！！）

スカートのポケットに手を突っ込む御坂。そして引き上げる。

完全にポケットから手が出ようとしたとき、あろうことか、コインは御坂の手からこぼれ落ちてしまった。

（マズった！！）

コインの落ちた音は聞こえない。爆弾が立てる、ギュウウウ、という音によって。

（間に合———）

ドン！！！

爆弾が立てる爆音が学園都市に響き渡る。

既に避難していた学生たちは爆発を見て騒ぎ始めていた。

「キャー！！」「何だ！？」「爆発？」

そんな様子を尻目に顔に生傷を作った少年はその場を離れる。

「例の連続爆破テロだって！」「逃げ遅れた人がまだ中にいるみたいだぞ」「ジャッジメントの子を見たって…」

少年はそのまま人気のない路地へと入っていく。

「ククク…」

その口から渇いた笑いが洩れる。

（いいぞ、今度こそ逝っただろう）

自らの能力の成長具合を確認するように。

「スゴイッ！　スバラシイぞ僕の力！！」

少年は歓喜する。

「徐々に強い力を使いこなせるようになってきたッ！！」

ただただ純粋に。

「もうすぐだ！　あと少し数をこなせば」

自らの目標の達成に。

「無能なジャッジメントもアイツラもみんなまとめて…」

顔には歪んだ笑顔が浮かぶ。

そして少年の後ろに立つ少年。

が、少年はそれに気付かない。それはどれだけ気分が高揚しているかを物語っている。

「吹き飛ばッ…！！？」

饒舌な少年を蹴り飛ばす少年。

「ブッガッ、ゲフッ」

三回転した後、ゴミ箱へ突っ込んで行く。

「？？」

いきなりのことに状況が読めない。

「な！？　一体何が…？」

疑問符を浮かべる少年に、不釣り合いなほど完成された笑顔を向ける。

「はあーい☆」

だが、完成されているからこそ作り笑いだとわかる。

「花火上げようってんなら、もうちょっと人が居ないとこでやった方がいいぜ？」

ズボンのポケットに手を突っ込んで、軽くおどけたように言って見せる。

「な　何の事だかぼくにはさっぱり…」

が少年はあくまでシラを切るつもりの様だった。そんな様子を横目に見て少年は一方的に話を続ける。

「だけど、花火にしちゃあずいぶんと品のない爆発だったよな？威力は確かにあったけど」

少年の完成された笑顔は崩れない。それどころか無邪気に笑うように続ける。

「けど残念だったなあ？　死傷者どころか誰一人、かすり傷一つ負ってなんかねぇよ」

その言葉に少年の目は大きく見開かれる。驚きを隠せないように。

「なっ――――」

「――――そんなバカなってか？」

もう一人の少年の口の端がさらに上がった。

「たいしたことねぇなあ、そんなんじゃジャッジメントどころか誰一人傷つけらんないぜ？」

「嘘だ！　僕の最大出力だぞ！？」

「ふぅん？」

カマをかけられた！　はっ、となった時には既にニヤニヤとした視線が送られていた。

シラを切り通す事が出来ないなら、口を封じればいい。少年は気付かれないよう後ろ手にバッグのファスナーを開けて、スプーンを取り出す。アルミ製の。

「い…いや、外から見てもスゴイ爆発だったんで」

気付かれないよう、悟られないよう、慎重に、慎重に。

「中の人はとても助からないんじゃないかと…」

そしてバッグから出た手は少年に向けて振られた。

勝った！！　そう確信した少年の顔は狂喜に満ちていた。

ドン！

爆音が路地に響き、砂煙が舞う。
辺りのコンクリは吹き飛びそこだけポッカリと空間が出来ていた。
少年は笑みを浮かべる。勝利を確信した、歪んだ笑みを。

「ひっでーな、これ」

ギクリ、と。
耳を疑う。まさか、砂煙の向こうからの声に。
一片の肉片も残すつもりはなかったの筈なのに。

「あー、煙い」

ケホケホ、とわざとらしく咳をする声が聞こえる。砂煙の向こうから。

「そろそろ終わりにしようぜ？　爆弾魔さんよ」

現れる少年。無傷の少年。笑う少年。

「う、うわあああああ」

目の前の非常識に少年は逃げ出す様にスプーンを投げる。
何個も、何個も。
しかし少年は立っていた。ズボンのポケットに手を突っ込んで。
ニヘラ笑い、空気をねじ曲げ、世界が許容しない雰囲気を纏って。

「気にする事はねーよ」

一歩一歩近づきながら、

「こんなもんはただの――――」
ズボンから両手を出して、
「――――不慮の事故だから」
その手を振り下ろす。
「ちょ…何よ、これ！？」
がそれより早く声が掛けられた。
徐に振り返ると、そこには御坂が立っていた。
「……よお」
「よお、じゃないわよ！！　なにこれ！？　どうなってんの！？」
「……まあ、見ての通りとしか」
御坂の目には路地と言うには不釣り合いな空間が写っていた。
「……で、何でお前がいんの？」
「何でって、爆弾魔捜すついでにアンタ捜してたのよ」
「俺ついでかよ」
そんな様子を見て、御坂が疑問を投げ掛ける。
「アンタも犯人捜してたのよね？」
「ん、いや、ちげえよ。爆発に巻き込まれないように逃げてきただけだ」
「ほう？」
「まあ、お前も当麻も動くのわかってたしな」

「アイツのこと信頼してるの？　アンタが？」
御坂の問い。
少年は一呼吸置いてから、
「そんなんじゃねーよ。あいつは偽善使いなだけだ」
少年の答に、全てを見透かした様に御坂は笑った。
「さてと、雑談は終わりだ」
少年の瞳は地べたを這いずり必死に逃げようとしている少年を捉えた。
「おい爆弾魔！」
ビクン、と。
爆弾魔と呼ばれた少年の肩が震えた。
「……お前が何でジャッジメントを狙ってんのか知らねーけど、つーか知りたくもない」
吐き捨てるように、
「それほどの力があって何やってんだよ？」
少年の問い。
答えはない。
「受け入れろ。現実を」

まるで言い聞かせるように、

「理不尽を。不条理を。不都合を。暴力を。迫害を。虐めを。」

まるで自分の事のように、

「それが出来ないなら――――」

再度吐き捨てるように、

「――――死ね」

――――――――――

――――――――

――――

「あのガキんちょと会うとロクな事がねぇな」

過ぎてしまった時間は取り戻せない。どこか諦めたように呟く少年。

「待たせたな、当麻」

散歩にでも行ってきた様子で友人と合流する。

「宗像、お前何処行ってたんだ？　探したんだぜ？」
「爆発が怖くて逃げてたんだよ」
御愁傷様、とシニカルに笑って宗像と呼ばれた少年は寮への道へ歩みを進めた。

それが出来ないのなら――――（後書き）

最後めんどくさくて放棄したわけではない。だからわちゃわちゃしてるのも気のせい。きっと気のせい。
途中もわちゃわちゃしてるのはただ下手くそなだけ。これが本気。
最近学校が忙しくて出来ないｏｒｚ
次は二週間くらいかかるかも（（（（；゜Д゜））））
ではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

運命の出会い（前書き）

テストですよ。簿記ですよ。むずかしいですよ。
予定より早く書き上げる。それが僕のクオリティー（笑）

冗談です。次はもっと早く書き上げるつもりです。
因みに今回オリキャラ出てきます。そりだけ。

では本編です

運命の出会い

いよいよ夏休み前日の七月十九日
明日っから夏休みだーっ！　などと尋常ではないハイなテンションになったからって書店で表紙を一目見ただけで地雷と分かるマンガは手に取らないし、お腹も空いてないのに一丁豪華に無駄食いするかーっ！　とファミレスには入らない。そう入らないのだ。何故なら――――

「宗像ちゃんは“記録術（かいはつ）”の単位がヤバイので補習ですよ」

「やってられるかー！」

口にしないと本当にやってられない。明日からお楽しみの夏休みだというのに、担任の子萌先生に満面の笑みで「また明日」と言われたのなら。
元々、おつむが悪いわけではないが“記録術”に関しては苦手科目だったし、宗像自身レベル０なので、加算される単位もなく、やはり点数勝負になる。そこでやらかしてしまえば夏休みは補習によって何日か潰れてしまう。

「はぁ……ふこーだー」

そして宗像はやらかしてしまったのだ。
どこかで聞いたことのある様なセリフを口にしながらとぼとぼと寮へ向かっていたとき少年、宗像清舟に、不意に声が掛けられた。

「あ、あの！」

首だけ振り向くと見知らぬ少女が居た。

「あン？　どちら様でェ？」

補習と言う現実を押し付けられずしゃべり方がおかしくなっていた。

（受け入れろ。現実を）

俺は爆弾魔に何て言った？　現実は簡単に受け入れられないよぅ……

「やってられるかー！」

ぐぎゃあ！　と頭を掻きむしったあと、太陽に吠える宗像への視線が痛かったのは言うまでもない。

（あれ？　なんだろう、この居たたまれない感じは）

さすがに自分に向けられた痛い視線に気が付き足早に立ち去ろうとすると、再度声が掛けられた。

「だ、大丈夫です、か？」

「あー、っと？」

白い制服の少女。セミロングの茶髪に軽いウェーブがかかっており、かわいらしい顔立ちの少女。

そんな少女に声を掛けられる覚えもなく、宗像は疑問符を浮かべていた。

「あ、あの！」

ほんのり上気して赤くなった顔で少女が言う。

「はい？」

状況が掴めない宗像は素っ頓狂な声で返答する。

「ここ、これから！　少し、お時間、い…い、です……か？」

今にも消え入りそうな声で、

「いいけど、俺に何の用？」

そう言うと、少女は満面の笑みを浮かべる。

「用って言えばそうなんですけど、これから……が決まる大事な大事な話がしたいって言うか何て言うか」

早口過ぎて要所が聞こえなかった。

「あー、大事な話があるんだな？」

「はい！」

「んじゃ、とりあえずファミレスでも行くかぁ」

立ち話もなんだしな、と、補習という現実により、いつもより低い声のトーンで言った宗像の隣を少女が「そ、そだね」と、恥ずかしそうに、消え入りそうな声で言ってついていった。

――――――――――
――――――――
――――

「で、大事な話って？」

用意されたストローではなく、直接口をつけてアイスコーヒーを飲み、同時に氷を口に入れて、ガリガリと音を立てながら少女に尋ねる。

「えと、話の前に自己紹介させて下さい……ダメ…かな」

相手の顔色を伺うように、

「え、あ、まあ、いいけど」

「ありがとっ！」

（いちいちリアクションが大袈裟だな）

そう思っていたとき、少女が徐に口を開いた。

「あの、名前は現川なるって言います……」

「あ、俺？　宗像ね」

適当に答えて相手の返答を待つ。

「あの、下の名前は？」
「え、清舟だけど、どうでもよくないか？　んで、話は？」
宗像の答に、少女の顔が一気に険しくなった。
「どうでもいいとか言わないでよ！」
「え？」
あまりの剣幕。思わず手にしていたグラスを置いてしまう。
「お、おい？　どうした、いきなり」
はっ、となって謝り始める現川。いきなり過ぎて訳がわからなくなっていた。
「あ、ごめ、ゴメンナサイ、嫌いにならないで……」
「ああ……嫌いにはならないけど、どうしたんだ？　ほんと」
そう宗像が言うと安心したように笑う。心底安心したように。
だが宗像としては何故怒鳴られたのだろう。それが引っ掛かった。
「怒鳴ったりしてゴメンナサイ。でもこれから二人の運命の話をするのに名前がわからないなんて重大な障害ですものね。」
「え？　二人の運命――――」
「そう二人の運命！　出会いも衝撃的だったよね？　不良に絡まれてる私を助けてくれた清舟くん、あ、勝手に下の名前で呼んじゃった！　ゴメンナサイ、宗像くんの方がいいかな？　私としては運命で結ばれてるんだから下の名前呼ばれって全然構わないよ？　で、宗像くんが不良に絡まれてる私を助けてくれたの。かっこよかった

なあ～。ポケットに手を入れたまま不良たちを蹴散らしちゃうんだもん。あのとき運命だってわかったなあ。宗像くんもそうでしょ？

それで今日！　宗像くんを見かけたの。運命の赤い糸で結ばれているからよね、きっと。これも神様が巡り合わせてくれた運命。だから、愛し合ってる二人の未来について、大事な大事なお話がしたかったの。まずは結婚よね。宗像くんってまだ結婚出来る年齢じゃないよね？　あー、早く結婚したいな。結婚式はどうする？　私はどっちでもいいけど、やっぱりチャペルがいいな。ウェディングドレスを着てみたいの。あ、宗像くんはどっちがいい？　私はそれに合わせるから。それから結婚のあとは旅行よね。新婚旅行。国内にする？　それとも国外がいいかな？　私はどこかの静かな島がいいな。二人っきりでビーチで遊ぶの。新婚旅行が終わったら、しばらく二人で暮らすの。新婚生活なのよ、きっと毎日が楽しいよね。ご飯にする？　お風呂にする？　それとも私？　そんなことも言ってみたり。あとあと、いってきますのキスとただいまのキスをするの。これは昔からの憧れだから譲れないなあ。でも宗像くんも私のこと愛してるからきっとしてくれるよね。あと、ベッド。宗像くんがお布団がいいって言うならそれでもいいけど、やっぱり一緒のベッドで寝たいな。宗像くんの腕に抱かれて。それで私は先に起きて朝ごはんを作るの。時間が来たら私が起こしに行くの。そうすると宗像くんがおはようのキスをしてくれるの。毎日毎日幸せな日々を過ごすの。でね、そのうち子供が出来て、女の子と男の子一人ずつ。名前は私と宗像くんの字を入れたいな。きっと宗像くんに似て格好いい子に育つと思うんだ。女の子でも宗像くんに似ればきっとかわいいよね。そうそう、きっと宗像くんも男の子だもん、他の女の子に目が行っちゃうと思うんだ。でも私、浮気は許すつもりなんだ。だって宗像くんが好きなのは顔であって、体であって、その女じゃないもの。宗像くんの愛を受けられるのは世界中の誰でもない私ただ一人だけ。でも、他の女が宗像くんの愛を受けようとするなら殺しちゃうかも。だってそんなの我慢ならないんだもん。そうそう、そ

れから食べ物の話なんだけれど、宗像くんは何が好きなのかな？
これからずぅーと一緒にいる訳じゃない？　だから宗像くんの好物は上手に作れる様になりたいなって思って。私はお料理得意じゃないんだけど宗像くんの為だから頑張って練習つもり。愛する人の口に入るものなんだもん、美味しくなくっちゃね。宗像くんの嫌いなもの出しちゃったら死んでも死にきれないもの。だけど他の家事は任せて、掃除洗濯、何でも宗像くんの為なら出来るよ。男の人の、パ　パンツは洗ったことないんだけど、宗像くんのだもん。嫌なわけないよ。あ、掃除と言えばなんだけど、宗像くんの……体も掃除してみたいな。えへ、ほら、お風呂で洗いっこしたいの。お互いに。その時は私が優しく背中を洗い流してあげるね♪　あ、その時って裸なんだよね、きゃ！　恥ずかしい！　けど宗像くんにだったら見せてもいいよ？　私の裸を見て宗像くんは興奮してくれるかな？胸だって人並みくらいにあるつもりだし、襲われたらどうしよっ♪
　でもそれって逆を言えば襲われないって事は私に魅力がないってことだよね？　どうしよ！　そうだ、宗像くんの好みの髪型とかに変えればいいんだ！　胸はデカイ方が好みなのかな？　髪型は？顔は変えられないから我慢してね？　でも大丈夫きっと大丈夫だと思うの。愛し合ってる人の顔だもん、嫌いなはずないよね？　というよりか私が宗像くんを襲えばいいんだ！　私が愛されるばっかりじゃ悪いもんね。そう、私も愛してるんだからそうすればいいのよ。でも、出来れば、む　宗像くんに、私の体を求めて欲しいな。女として。」
「……え、なんか言った？」
「ううん、何でもない！」
目の前のデンジャラスな少女の話は宗像の耳には一切入っていなかった。
「つーか最近遭遇率高過ぎ……」

宗像の目には常盤台中学の制服が映っていた。
映っていただけで何故、危険度ＭＡＸの少女の話が一欠片も残らないのか。それは御坂美琴があまりにも異状で異常で異例で異質で異色だったからだ。
要約すると、普段と違ってなんか、こう……気持ち悪い。
目の端に涙を浮かべ、か弱い女の子の雰囲気を醸し出す御坂美琴何て……そんなのは御坂美琴の形をした別人と思うしかないくらい気持ち悪かった。

（……女って恐ぇ）

そう思っていたとき、

「……当麻？」

宗像の視線の先、そこにはなにもしなくても不幸がやって来るのに、自ら不幸になろうと偽善を振り撒く少年の姿があった。

「あの…当麻って誰ですか？」

白い制服の少女の質問。顔を向けず答える。

「あー、ほらあれ」

御坂が話していた男達と喋っているウニ頭の少年を指差しながら、

「あのウニ頭の奴。俺の一番嫌いな奴だな」

笑いながら、冗談に聞こえる本音を少女に言う。

「一番……嫌い」
「そうそう、ゴキブリ並みの生命力……は叩けば死ぬ程度か。アイツは一人や二人に叩かれた程度じゃ死なないからな」
宗像の言葉。軽い冗談で言った。
言葉というのはそれぞれ感じ方、解釈によって意味が変わってくる。
そして少女、現川は宗像のソレを冗談だとは思わなかった。
叩いても死なない。
「宗像くんの一番嫌いな当麻さんは≪大勢に叩かれる≫と、どうなるだろう？」
「え？」
白い制服の少女の言葉が終わると同時。今までいた三人に加えて、トイレからぞろぞろとガラの悪そうな男が出てくる。
「お前、今なん―――」
宗像の言葉を遮る様に怒鳴り声が店内に響く。
そして上条は、なにか叫びながら外へ飛び出して行く。
「……可哀想に。ナムナム」
軽く冗談っぽく笑って席を立つ。
現川がなにかした気がしたが今はあの偽善使いを助ける為、動く事にする。

「わりぃな、現川！　急用できたからまた今度！」

振り返らずに言う。既に店を出た上条、御坂を追うために。

（ったく、偽善使いは俺も同じじゃねーか）

胸の中で呟いた宗像の脚は上条達を追いかけ、走り出していた。

「あの！　……あーあ、行っちゃった。私ったら口下手なんだもんなあ」

現川の声は届かない。宗像の背中を見送りながら口の中で呟く。

また今度。

運命で結ばれている。また会える。何せ私は口下手なんだから。

――――――――

――――――

――――

「意味ねえよ！！」

宗像の声が路地裏に小さく木霊する。
もう店を出て、かなり時間が経っていた。上条を捜すため街中を走れば、どこを見ても幸せいっぱい夢いっぱいなカップル達ばかりで、俺はなにやってんだろう？　と嫌でも思い知った宗像がようやく見つけたと思えば、既に焼かれたスキルアウトの死体（正確には死んでない）で、全くもって、ラヴもコメディもない。

「あれ……？　なんでだろう、目からしょっぺぇ汁がでてきやがる」

自分自身に送る、慰めにも似た言葉。言ってから思う。負け犬過ぎる、と。

「ん？」

大通りに出てしばらく歩いていると怒鳴り声が。だが、それに気付いているのは宗像だけで、行き交うカップルはそれに気付きはしない。

「……野次馬根性ってか」

ただなんとなく。どこを見てもカップルだらけなのに裏路地ではどんな奴が怒鳴っているのか、ほんの少し興味があった。どうせなら腹いせついでに参加しようかな、とか考えつつ路地を覗くと、

「……、」

あまりに酸鼻な光景に宗像は眉をひそめる。

「……酷いな」

違いすぎる。後ろからは手を繋いだカップルの笑い声が聞こえるのに、目の前では血の滴る水音しか聞こえない。
ソレはまるで十字架に張り付けられた罪人のように。
一人は壁に。一人は地面に。そうした五つのモノが螺子によって貫かれ、張り付き、転がっていた。

『確かに。』

距離にして五メートルないし七、八メートルくらい先からの声。普通は気付かない距離ではない。声の主は少しおどけた口調で、

『気付けないのはしょうがないよ。だって僕は、気配を虚構(なかったこと)にしたからね』

月明かりに照らされた少年の顔は返り血とともに、無邪気な笑みを浮かべ、その手には禍々しい螺子が握られていた。

運命の出会い（後書き）

ヤンデレ？　恋の病を患っているだけです。
江迎の劣化とか言わないで下さい。江迎ちゃんが出てこないから代わりの要員なんです。因みに彼女も過負荷ですよ。口下手なんですよ、口下手。

あとなんの関係もないけど明日は県民の日です。
以上！

ではこんな駄文にお付きあい頂きありがとうございました

壁を越える事が出来るのなら（前書き）

さて、テスト終わりました。簿記以外はまあまあでした。簿記はオワタ。
そんな感じで
では本編です

壁を越える事が出来るのなら

七月二十日

「あっ……つぅ」

学園都市の学生寮の一室、喉の渇きを感じながら目覚めた宗像清舟は、一言。

「ふぁ～～～…はぁ、ねむ」

まだ眠たい体に鞭打って体を起こすと、既に時刻は午前八時を過ぎていた。

「……補習、かよ」

恨めしそうに、厭わしそうに呟いてボチボチ着替え始める。
夏休み初日からついてねぇ、と心の中で愚痴りながら部屋を後にする。

「当麻は…よし、置いていこう」

どうせ子萌先生から連絡網（ラヴコール）がいってるだろうし、構う必要もない。
今朝も不幸、不幸と言っているのだろうし、その不幸に巻き込まれるのは勘弁して欲しい。
などと思いつつ学校に向かうのだった。

―――――――――――
―――――――――
―――

「はーい。それじゃ先生プリント作ってきたのでまずは配るですー。それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

頬杖をつきながら大儀そうに欠伸する宗像は、相変わらずのサイズの先生を見ながらあり得ねえと思っていた。
そして後ろには授業が始まる前から既にぐだー、っと夏休みモードに突入しているクラスメイトの姿が。

「すっかり夏休みモードですね、上条ちゃん」

プリントを配る為に教室を歩いていた子萌先生から上条に声が掛けられた。
教室に駆け込んで来るなり机に突っ伏しているのだ。何を言われても仕方ない。この際何も聞かないことにしようと思いながら宗像は振り向くと、案の定生気が欠けた上条の姿がある。

「いや、朝っぱらから全力疾走で全身に炭酸が…」
「乳酸ですうー」

そんなんだから補習なんだよ、と手渡されるプリントを受け取りながら呆れていると、子萌先生が恐ろしい事をいい始める。

「おしゃべりは止めないですけど先生の話は聞いてもらわないと困るですー。先生、気合い入れて小テストも作ってきたので点が悪かったら罰ゲームはすけすけ見る見るですー」

なん…だとッ！？
ゾグン、と。
教室全体に緊張が走る。それは宗像も例外なく、苦笑を浮かべる余裕すらなくなっていた。
額には嫌な汗をかいていた。
が、上条は抗議の声をあげる。小テスト云々ではなく、罰ゲームの内容について。

「ってかそれ目隠しでポーカーしろってアレでしょう先生！　ありゃ透視能力（クレアボイアンス）専攻の時間割り（カリキュラム）だし！　手元のカードも見えないのに十回連続で勝てるまで帰っちゃダメとか言われたらそのまま朝までナマ居残りだとわたくし上条当麻は思うのでせうが！」
「はいー。けれど上条ちゃん…と宗像ちゃんは記録術の単位足りないのでどのみちすけすけ見る見るですよ？」

「……、」

言葉が見つからないとはまさにこの事。思わぬ伏兵の攻撃の矛先は、あろうことか上条のみならず宗像にも向けられたのだ。

「……むう。あれやね。子萌ちゃんはカミやんが可愛くて仕方がないんやね。ムナやんは知らんけど」

と、上条の隣の席に座っている青紙が訳の分からない事をいい始めた。

「……おまいはあの楽しそうに国場に背伸びしてる先生の背中に悪意を感じられんのか？」

「…なに？　ええやん可愛い先生にテストの赤点なじられんのも。あんなお子様に言葉で責められるなんてカミやん経験値高いでー？」
「当麻の癖は置いといて、青髪…人はお前の事を変態と呼ぶんだぞ？」

すっかり消沈していた宗像が復活し、会話に加わる。

「ちょっと待て！」

と、ここで上条から待ったの声。

「どーした？」
「宗像、俺はお子様に言葉責めされて悦ぶロリコンのMでは談じてない！　それを言うなら青髪の方こそだろ！」
「あん？　別に気にする必要は無いぞ？　お前が変態でも友達で居てやるから」
「まてまてまて！　ロリコンでMなのは青髪の方ですから！　そこんとこ間違えないでくれ」

上条の必死の言葉を聞いている横で青髪が、それは聞き捨てならないと異論を唱える。

「あッはーッ！　カミやんムナやん、ロリ『が』好きとちゃうでーっ！　ロリ『も』好きなんやでーっ！！」

ここまで来ると救いようがねー、と思わず苦笑する宗像。
上条が何か言おうとした所で、

「はーいそこっ！　それ以上一言でもしゃべりやがったらコロンブスの卵ですよー？」

コロンブスの卵とは逆さにした生卵をなんの支えもなく机の上に立ててみろ、と、そういう事だ。
念動力（サイコキネシス）専攻の人間だって苦戦するものを、スプーン１つ曲げられない宗像、上条には不可能を可能にしろと言っているものだ。
しかも出来なければやはりナマ居残り。

「おーけーですかー？」

笑ってるけど笑ってねー。その目は確実に笑ってねー。
授業中は大人しくしてようと心に決めた宗像だった。

「――――…、気持ち悪りぃ」

はたと。小さな呟き。ぼーっとしているとき思い出された事。
昨夜の出来事。何が気持ち悪いっていえば全てが気持ち悪かった。

――――――――
――――――――
――――

「……で、こんな素敵光景はお前がやったのか？」

宗像の眼前には今はもう息をしていないモノがあった。

『誰がやったのかと聞かれればそれは僕だよ』

「否定しないのな」

『うん、だって僕は悪くないもん』

その声には一切の悪気は感じられない。まるで本当に自分は悪くないと言っているかのように。

『それにしたってひどいよね、いきなり因縁つけて来るんだもん』

取り出したハンカチで顔についた血を拭いながら、

『だからちょっと…螺子伏せただけだよ』

「ちょっとで人殺すなら心療外科に通う事をお勧めするけど？」

うーん、そうだね、と、顎に手を当てて思案顔を浮かべる学ランの少年。

『でも止めとくよ。親に心配かけたくないし』

まるでアメコミみたいに肩を竦めて、

『それじゃ僕はそろそろ行くよ。じゃあね』

「な！？　待てよ！　人殺しの現行犯黙認するほど人間出来てねーんだよ、こっちは」

『もぉー、勘違いしないでほしいな？　僕は人殺しなんてしてないけど？　全部虚構(なかったこと)したからね』

「……言ってる意味がわかんねぇよ」

やったのにやってないと言い張る少年。聞き分けのない幼稚園児と

会話している気分になる。

『どっちかっていうと僕は被害者なんだけどなあ』

やれやれと呆れた様に言って螺子を取り出す。

『じゃあこれなら許してもらえるかな？』

ズン！

一つの螺子が頭部を貫通する。

『うん、僕は行くけどいいよね？』

ニコニコ無邪気な笑みを浮かべ、真っ赤な鮮血を滴らせて。

『じゃあ見知らぬ誰かさん、また明日ぐらいに会おうね』

振り向く事なく手を振る後ろ姿。

これ程までに気持ち悪いと思う人間が居るとは十数年の人生の中で想像もしなかった。

良い意味でも悪い意味でも鮮烈に印象に残る男。

「おい！　待てよ！　行きやがった……、つかこれどうすんだよ」

宗像の視線は螺子の突き刺さった五つのモノ。

「――――ッ！？」

ピクン、と。僅かな動き。

「おいおいおい……勘弁してくれよ」

――――――――――

――――――――

――――

「……は？」

唐突に戻される意識。突き刺さる視線。

「……え、な、は？」

泣きそうな子萌先生。沈黙する教室。
全てを悟る時には既に遅し。
授業に集中しない不良生徒二人（上条、宗像）にショックを受けて、
半べそかいて物凄く切なそうな顔の先生。
突き刺さる視線は、子供（子萌先生）を守ろうとするペアレント（生徒）の視線。

――――――――――
――――――――
――――

「……やっと、やっと解放された」
「……、不幸だ」

二人の絞り出す声。結局、完全下校時間まで拘束され続けたのだ、何か言うにしたって憔悴がついて回る。
そんな憔悴しきった少年、上条当麻はやはり憔悴しきった少年、宗像清舟に話し掛ける。

「なぁ、宗像」
「ん？」
「もしもベランダに電波系妄想少女が倒れ死にしてたらどうする？」
「ハ？」
「いや、なんでもない」

あっそう、と手短に終わらせる。終わらせてから考えてみる。

（ベランダに電波系妄想少女が倒れ死にしてたら、か……うわ、ゾッとしねぇ）

今度はどんな不幸に巻き込まれたんだ？　と隣を歩く上条はドラム缶（警備ロボ）を見ながらぼーっとしていた。

「んじゃあな」

「……え？」
「俺、外で飯食ってくから先帰ってろ」
どうせ寮に戻った所で冷蔵庫は壊れているし（昨日、落雷があって他の家電もイカれた）、何も入ってない。終バスも終わってるから一度帰ってから出掛けるのは面倒くさいと。
「…あー、わかった。じゃあな」
友人に別れを告げ近くのファミレスを探す。

――――――――
――――――
――――

「大きなため息～♪　卑屈の二文字♪」
音楽プレイヤーから流れる音にあわせて軽く歌う宗像。
「あらゆる手を尽くしても～…って、うお！？」
「いった～……、すいません」

歩いていたら、向こうから走ってきた人にぶつかってしまった。

「あ、いや、こっちこそ悪かった」

「……って、あれ？　宗像さん？」

どこかで聞いたことのある声。セミロングの黒髪。白梅の髪飾りが特長的な少女。

名前は佐天涙子。

「佐天？　久しぶりだな。慌ててどうした？」

本当に急いでいたら聞くべきではないだろうが一応聞いてみる。

「……あー、ちょっとありまして」

「訳あり？」

「…はい」

「一人で解決出来そうなのか？」

「どうでしょうね……難しいですよ」

佐天は少し俯いて、

「なら頼れよ、ジャッジメントの初春だっけ？」

その声に反応し、さらに俯く。

「そ、それが出来たら楽なんですけどねー」

声の調子は明るい。だから作って明るくしているのだと分かる。

「……そっか、頑張れとは言わないけど、あんま無理しねー方が良

いぞ？」
「……、」
「じゃあ俺行くわ」
「……はい、また…今度」

宗像の背中を見ながら、

「む、宗像さん！」
「ん？」

別れ際、佐天の問い掛け。

「もしも、もしも楽して能力を手に入れられる道具があったら使いますか？」

どこか晴れない顔。納得していなくて、不安と苦悩の満ちた、そんな表情。

「……アイテムなぁぞ、つかってんじゃねー！」
「え！？」
「と言うのが正しいのだろうが、俺は使うよ」

迷いなく、まっすぐ目を見て、

「それがどんなに格好悪くても、間違ってても、醜くても、汚なくても、それで越えられない壁を、才能の壁を越える事が出来るのなら、俺は迷わず使うよ」
「……そうですか…ありがとうございました」
「ん、じゃあな」

佐天に別れを告げ、ファミレスへ向かう。
別れてから思い出す佐天の顔。宗像の答えを聞いたって不安と苦悩に満ちていて、納得してなくて、結局の所、吹っ切れてなくて、だから何か考えた様な顔だった。

「偽善だったかな……いや、偽善にもならねぇ」

少年の唇からそんな呟きが洩れていた。

壁を越える事が出来るのなら（後書き）

禁書目録編の長い長いプロローグです。いやね、どうしても佐天とのくだりを書きたかったんですよ。宗像が言ったから幻想御手を使う訳ではないだろうけど、一応影響されてみたいなね。あと球磨川も出しといて、現川も出しといて、とか色々下準備でした。でもしばらくは禁書目録編に突入。あ、でも球磨川は出てくるかも。まあ、見てやって下さい。そろそろ眠気も最高潮なので寝ます。
あと、禁書編入っても文は下手くそなのでそこんとこよろしくお願いします。

ではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

度々失礼します。球磨川さんに螺子伏せられた不良どもは生きてます。そりだけ。ＰＴＳＤになっただろうけど。

胸糞悪りぃ趣味してんな（前書き）

スペイン系の料理を出すファミレスは確か、ヴェントが学園都市に来たとき打ち止めと上条さんが逃げ込んだ店だったはず。

眠たいのでこの辺で。

では本編です

胸糞悪りぃ趣味してんな

スペイン系の料理を出すファミレスから宗像が男子寮に戻った頃には既に空は宵闇に染まりつつあった。

「ふぅ…流石に腹一杯だな。さっさと帰って寝るか……」

男子寮の前までやって来た宗像は大儀そうに欠伸しながらそう呟く。その男子寮は夏休み初日ということもあってかほとんどの学生が遊び呆けているのだろう。人の気配が感じられなかった。入り口のオートロックを抜け、管理人室の横を通り過ぎてエレベーターに乗る。

いつも通りの光景だった。

七階のボタンを押して、動き始めるエレベーター。

が、表示が四階に差し掛かった所でエレベーターが爆音と共に激しく揺れる。

「は！？　地震？」

ネズミが支配する夢の国（シーの方）に垂直落下するというアトラクションがあるがまさにそんな感覚だった。

「……、おお、すっげ」

食後ということもあり、ぼーっとしていた宗像は激しい揺れに思わず狼狽する。

そして、軽いアトラクション気分を味わい、暫くした所でエレベーターの表示は自室がある七階を示していた。

（何だったんだ……？　土御門辺りがなんかやらかしたのか、当麻……どっちかだな）

それぞれの顔を思い浮かべながら苦笑すると、がこがこ、と古ぼけた音を立てながらエレベーターのドアが開く。

「……、」

ドアが開いた瞬間、頬に刺すようなジリジリとした熱気がエレベーターの中に流れ込んでくる。
それは季節からくるものではなく、間違いなく何か別のものによって。

（……焼け焦げた匂い？）

爆発でもあったのか？　と、半分くらい冗談を考えつつエレベーターから出ると、

「……。」

ゴクリ、と。
思わず目の前の光景に息を呑む。

「こりゃあ酷いってもんじゃねぇな…」

砂塵の様に煙が舞う中、天井からは蛍光灯が溶けて滴り落ち、飴細工のようにひしゃげた手すりが見えた。
そしてその奥、そこには人影のような物も見える。
地獄の様な光景を前に、アイツは何をやってんだ？　と、宗像は慎重に近づいて行く。

「……、『魔女狩りの王（イノケンティウス）』――――ッ！？　誰だ！？」

反射的に振り返る男。よほど宗像の登場が意外なのか、男は舌打ちしたあと何かを呟く。

「人の出入りはない筈なのにどうして……？」

宗像は男の姿が見える位置にやって来たところで、

「……夏休みだからって勝手にテンションあがんのはいいけど、人様の家の前でなにやってんだ？」

その男は外国人特有の長身に漆黒の修道服を着て、その指には左右に十個の指輪が嵌められ、右目の瞼のしたにバーコードの様なタトゥーが彫られ、耳には毒々しいピアスに、肩まである髪の毛は真っ赤に染め上げられていた。

これを神父と呼ぶには誰もが抵抗を示すだろう。

明らかに学園都市の人間とは思えない男に宗像は怪訝そうな目を向ける。

「……」

宗像の問いに返答はない。

そして男はため息を吐いて、

「――――Ｆｏｒｔｉｓ９３１」

男は宣言するように何かを言い、

「は？　何だって？」
「灰は灰に――――」
しかし、男は宗像を無視し、機械的に言葉を発する。
「なぁ、おい」
「――――塵は塵に――――」
男の言葉は人間味に欠け、無機質で感情が籠っていない。
しかし、男の眼には確かに殺意が灯っている。
男が一言告げたとき、音もなくその両手に炎の剣が伸びて行く。
「……そんなんでなにしようってんだ？」
宗像の問い掛けは最早男の耳には届いてすらいなかった。
口の中で舌打ちした宗像に向けて、男は無機質な声で続ける。
「――――――吸血殺しの紅十字！」
男が全ての言葉を終えたとき、宗像に向けて炎剣は叩きつけられていた。
黒煙が舞い、辺りの視界を覆っていた。
後に残るは地獄の様な光景だろうと、男は自分がやった事を鼻で笑う。
跡形もなく、床や壁は塗装がめくれ上がり、高温でひしゃげた手すりや蛍光灯が滴り落ちる。
「……今度は殺ったかな」
確かめる様に呟く男は、煙の中を透かし見るようにする。

「ケホッ…、ケホッ、なに、しやがんだよ！」
「――――――なッ」
だが、宗像の声を聞いた瞬間、男の顔が一気に険しくなる。
「……お前、高レベルの発火能力者か？！」
宗像の問い。またしても答える様子は無い。
「全く何なんだろうね、一体。あの少年にしたって君にしたって！」
厭わしそうに、忌まわしそうに、なにより不快そうに男は吐き捨てる。
「『魔女狩りの王』が少年を殺したら次はキミの番だ。覚悟しといた方が良いよ」
いのけんていうす？　少年を殺す？　いきなり超展開過ぎんだよこんチクショー！
男の言っている意味もわからないし、何でこんな状況でいきなり攻撃されるんだろう。
宗像の頭の中には『？』が飛び交う。
そして、
「なにしてんのか知らねぇけど、他人の迷惑顧みない奴は嫌われんぜ――――」
「――――ひっ、わああああああああああああ！！」
宗像の言葉の途中、突然悲鳴が飛び込んだ。

「……、」

悲鳴がした下を覗き込むと、

「……おいおいおい何だよ、ありゃ……？」

二階の手すりに張り付いた人の形をした炎の塊がいた。
だが、炎の巨神はどこかを睨み付ける様にして動こうとしない。
あんな『魔術（オカルト）』じみた能力を宗像は見たことがない。

「いちいちこっちを見るな。……でもまあ、死ぬ前に教えてあげる」

確認する様に男に視線を移した宗像に対して忌々しそうにに呟き、

「『魔女狩りの王』――――意味は『必ず殺す』。キミを殺すモノさ」

男はわざとらしく口の端をにやりと曲げる。

「……、」

そんな男の見て宗像の唇からため息が洩れる。
再び下を覗き込むと、ふらふらとした足取りの友人が見てとれた。

「…なにやってんだよ、当麻」

ため息交じりに呟いて、宗像は目の前の男を見据える。

「……もっかい聞くけど、お前、なにやってんだよ？」

「……キミに言う義理は無いんだけどね？」

男の頬に冷や汗が伝う。先程わざとらしく虚勢の笑みを浮かべたものの手札である炎剣が通用しない以上『魔女狩りの王』が上条を始末するまで持ちこたえなければならない。しかも相手はどんな力を使っているかわからない以上逆手を取ることが出来ない。
能力がわからない以上下手に対策を練ることすらかなわない。
男の住む世界での『戦闘』で、これは決定的な痛手だった。
今の状況で出来る事があるとしたらただ一つ。
男は宗像から視線を外して、

「仕事だよ、仕事。回収の仕事。……ソレのね」

男の視線の先、赤黒い水溜まりに転がっている少女。

「――色々と大変なんだよね、これでも。このあとの予定も詰まってるし…さっさとぶっ殺されてくれないかな？」
「……女子供血だるまにして回収とか抜かすなよ？　随分と胸糞悪りぃ趣味してんな」
「僕がソレ斬った訳じゃ無いんだけどね。本当は『歩く教か――――」

男が時間稼ぎの言葉を紡ごうとしたとき言葉の途中で建物に設置されている火災報知器のベルが、一斉に鳴り響いた。

「！？」

男が天井を見上げたのを見て、宗像も釣られて上を見る。
そこらかしこから聞こえる報知器の音に次いで、一秒と待たずにスプリンクラーから豪雨の様に人工的に作られた雨が降り注ぐ。

（…、クソッ……どうしたものか）

男は口の中で呟いて、血まみれの少女と非常階段との距離を目測する。
ここまで騒ぎが大きくなってしまえば、消防隊がやって来るだろう。
何も少年達を殺す必要はないのだ。あくまで少女の回収が仕事。
ただし問題は目の前の少年だった。
少年と対峙した状態で少女一人を抱えて逃げ切るというには危険過ぎる選択だ。
そして少年に『魔女狩りの王』の相手をしてもらうため呼ぼうとしたときだった。
宗像の背後からエレベーターが開く時に聞こえる、ガラクタみたいな音がした。

胸糞悪りぃ趣味してんな（後書き）

眠いです。下手くそなのはいつも通りなのでおきになさらず、ツマンネって思われたのでしたら進歩はないのでもう会うこともないでしょう。
眠たいのでテンションがおかしいですね、わかります。
まあそのうち、投稿するんで
ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

今、終わらせてやる（前書き）

皆々様方、お久しぶりでございます。
そして報告、ケータイ治ったよー！

あと、これは……もう、アレだ、そう才能の欠如だ、根本的に欠落している。
そんな奴が書いていることをもう一度思い出されながら、それでも「貴様のために時間を割いてやろう」とおっしゃれる方のみ見てくださいm（＿＿）m

そんだけ酷い出来上がりなので悪しからず

では本編です

今、終わらせてやる

宗像の目の前の男は、身の内から小刻みに震えていた。理由もわからずに。
そして背後からキンコーン、とちゃちな音と共に、右手に神様の奇跡さえ一撃で打ち消してしまう『幻想殺し』を宿した少年、

「……、ってあれ？　何で宗像が居るんだ？」

上条当麻が、そこにいた。

「当麻！　おまっ……そりゃオレのセリフだっつの……」
「……あー、今は事情は言えねーけど、やることがあるんだ。ちょっと退いててくんねぇかな？」

上条はバツが悪そうに頬を掻いた。

「ちょっと待てよ？　お前の巻き込まれてる不幸に興味はないが、俺にもやることがあんだよ」

しかし、宗像は納得してない様子で“敵”に鋭い目線を送る。

「……はぁ」

そんな宗像を見て上条は小さくため息して、

「もう……何だっていいさ……目の前のクソ野郎をぶん殴る事が出来んなら！」

上条の言葉を聞いて、宗像は「話が早くて助かる」と目の前の“敵”を見据えて不敵に笑って見せた。

（……クソッ！　自動追尾の『魔女狩りの王』は一体どうしたんだ！？）

男は目の前の光景に焦燥を抱いていた。
『魔女狩りの王』から逃げ切ってここに現れた上条当麻。
戦力未知数の謎の少年。
男が焦燥するには十分過ぎる。

「――――『魔女狩りの王』！」

男の望みとも言える叫び。
その声を待ち焦がれていたかの様に、呼ばれた瞬間、『魔女狩りの王』は二人の背後からエレベーターのドアをアメ細工のように溶かしながら通路に這い出てきた。

「は、はは。あはははははは！　残念だったね！　でも僕の勝ちみたい！」

男は狂笑する。さながら勝利の確信をしたように。
しかし、宗像の唇は、にやりと曲がる。

「……、何て言うか……現実受け止めた方がいいんじゃねーのか？」

軽口を叩いて不敵に笑いつつ、ゆらりと一歩。

「はっ！　キミの方こそ最期の手向けでもしてあげようか！？」
「……そうゆーのは、棺桶に片足突っ込んだジーさんにでもやってやれってんだ」
呟いたあと、宗像は走り出す。目の前の男を殴り倒すために。

しかし、宗像の右手が男の顔に入る、それよりも前に炎剣を叩き付けられる。
完全に殺った。感触もあった。
しかし、
「……な！？」
「何勝手に勝利を確信しました、みたいな声あげてんだよ」
摂氏三〇〇〇度の炎に溶かされている筈なのに――なのにまたあの少年は全く堪えていない。
黒煙の向こうから、声がする？
自分の力に自信があるから、天才と自負しているからそれを、認められない。認めない。認識出来ない。認識しない。
「クソ！　クソッ！！」
目の前の異常から、非常識から逃げるように、男は幾重にも、幾重にも炎剣を叩き付ける。それでどうにかなるとは思わなかった。けれどやらなければ、あの少年は何をするか――――自分はどうなるか……

男は一心不乱に炎剣を叩き付ける。

「……はぁ、はぁ……殺った……？」

どれ程の時間がたったかわからない。ほんの一瞬かもしれないし、一時間以上かかったかもしれない。肩を激しく上下させ、額には汗を浮かべながら男は呟いた。

最後に炎剣を叩きつけたときには、感触がなかった。一縷の様な不確かな光景を見て、男の人間らしい一部が少しだけ安堵した。

だが次の瞬間、間抜けな音を立てて消えていく炎の巨神が消えていくのを男の目は確かに捉えた。

それは、先程安堵した人間らしい一部を一瞬で、いとも容易く刈り取っていった。

「ば、か――――な。なぜ、何故！　僕のコピー用紙（ルーン）はまだ死んでないのに……ッ！」

一人は殺った。けれどもう一人。

「テメェがベタベタ貼っつけたコピー用紙、今どうなってる？」

炎剣を叩き付けたせいで黒煙が舞う中、声が聞こえた。

言葉の意味。それの通り頭の中で考えてみる。

「……インク」

答えが出ないまま硬直していると、上条の声が男の耳に届く。

それを聞いてから、暫くしてようやくハッとする。

「インク！？　インクが！？　インクはどう……！」
「残念ながら濡れて落ちちまったみてーだな。全部潰すことはできなかったみてぇだが」

上条の言葉通り、まるでインクが水に流れて落ちていくたびに『魔女狩りの王』は弱々しくなり、今や黒い肉片が、力なくもぞもぞと動くのみとなった。

「い、のけんてぃうす……『魔女狩りの王』！」

男は叫ぶ。
まるで一方的に切られた電話の受話器に叫ぶような声で。

「さて、と」

上条の一言。
その一言ですら、男は恐怖に近い感情が沸き立つ。

「い、の……けんてぃうす」

男の声。
その一声で変えてきた世界は、今はもう変わることはない。

パシャ、と。
その音は、まるで水溜まりになった床を歩いたかのような音を、男の耳が捉えた。

ゆっくりと、緩慢な動作。
振り向くな。後ろを向いてはならない。

脳のどこかがそう警告していた。
しかし、微かに赤い髪が揺れ、男がゆっくりと振り返る。
そして、その瞳が捉えたのは———

「いい加減、こっちはお前の顔は見飽きてんだよ……終わりにしようや」

端然とした声。
その声の主が湛えるのは、ただただ純粋な、澄みきった邪。

「あ……ああ。ううう、いいいのけんてぃうす……イノケンティウス、魔女狩りの王！」

今ある男の感情は恐怖じゃない。恐慌でも狼狽でも慄然でもない。
物凄く気持ちが悪い。心底気分が悪い。

「いのけんてぃうす……いのけんテぃうス。イのけンてィウス。イのケンティウス。イのケンテぃうス。」
「……。」

頭を抱えながら小刻みに震える男。

「……ぼ、ぼ…僕は……」

自分の言葉を噛み締めながらゆっくりと、

「……か、彼女を助けるためなら誰でも殺す。いくらでも壊す。そう決めた。そう、決めた。そう、決めた」

心の真ん中にある支えにすがるように男は渇いた唇から言葉を洩らす。

「今、終わらせてやる……」

どこまでも繊細で澄んだ邪のその、たった一言は、どのまでも冷たくて、男の支えを一瞬で飲み込んで、あっという間に激しい嫌悪感に引きずり込んで、不意に痛烈な不快感を叩き付ける。
そして男をじっと見つめて、低い声で呟く宗像。

「　　。」

瞬間、感情の色が消えた宗像の瞳が、グッと見開かれたとき、

「……、何すんだよ…当麻」

その体が二三歩後ろへよろめいていた。
宗像の瞳は男ではなく、友人の姿が映っていた。

「宗像、お前何するつもりだよ？」
「……、」
「何するつもりだって聞いてんだよ！」

語気を荒げ、宗像に向かって上条が言う。

「殺すんだよ」

しかし、宗像は眉一つ微動だにせず言い放つ。

「退けよ、邪魔だ」

「退かねえよ…お前がコイツのこと殺そうってんなら、俺はお前をぶっ倒す！」
「……何で、ソイツの肩持つんだよ？　別にソイツが死んだところでお前が困んのか？」
「コイツがお前に何したかは見てたから知ってっけど、だからって死んでいい理由にはならないに決まってんだろ！」

ピクン、と。
一切の変化がなかった宗像の表情が僅かに動く。

———そんなんだから…オレはお前が嫌いなんだよ

宗像はため息交じりに舌打ちしたあと、うなじに手を回して軽く撫で上げる。

「……わぁーたよ、何もしねえ」

両手を顔の高さまで上げてぶらぶらと振って見せる。

「いつまでもにらめっこしてねぇで、そっちの怪我人どうにかした方がいいんじゃねえか？」
「……ああ、そうだな」

宗像提案通り、血だらけの少女の方へ視線を向ける上条。
それと同時に、宗像の口の端が歪む。

ドチャッ、と、漆黒の修道服を着た神父は水溜まりになった床に倒れ伏す。

（……ショックで気でも失ったかな）

「！？　おい！　どうした！？」

「当麻、そっちは後だ。コイツ、出血量が多すぎる」

一秒毎に、確実に死に向かって歩みを進める少女に視線を向けながら宗像が上条を諭す。

「気ぃ失ってるだけだ！　過度のストレスを溜め込んだからだ！」

「でも！」

「――――コイツらは学園都市の人間じゃない。なら、なおさらソッチの白いの連れて逃げるべきだとオレは思う」

学園都市は“外の人間”を嫌う傾向があり、街の周りは壁で覆われ、三基の衛星が監視の目を光らせる徹底ぶり。

もちろん、中に入るためには専用のＩＤが必要で、それが無いなんて話にもならない。

だとしたら、病院には連れて行けないのは必然である。しかも死人一歩手前の状況を一刻も早く治療しなければならないのに、二メートルを越える男を担いで移動するなど土台無理な話だ。

だからこその選択。

「行くぞ、当麻」

「……あぁ」

どこか晴れない心を押し殺して、上条達は移動の準備を始めた。

今、終わらせてやる（後書き）

必要性が高過ぎて蛇足と呼ぶには無理があるのでわたくしめから説明をば。

まずはアレです、ごめんなさい。
ステイルに向かって宗像がダッシュしたところです。こんなに速く呪文唱えられんのかよ！！
とまぁこんな感じで。ご都合主義……良い言葉だw

あとあと、ステイルを殺そうとしたとき、宗像の体が二三歩後ろへよろめいていたのは上条さんにぶん殴られたからです。おーけーですかー？

んでもって最後の方、「もういや！　俺には無理ッ！　なんだ！？　もうなんなんだ！？　下手くそな文ばっかり量産しやがって！　もう寝る！」てっ投げ出したこととか、上条さんのセリフがアクセロリ……ゲフンゲフンッ
アクセラレータのセリフぽかったこととか、ステイルが気絶したのは血管迷走神経反射性失神であることとか……実は気絶したのはよくわかってないで言ってることとか、すいませんでした。あと長くなってすいませんでした。

あと最後に、『不慮の事故』の能力についてわからない事があれば質問受け付けます。出来る限り……

まぁこんなもんで。

ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました。

インデックスと魔術（前書き）

お久しぶりですね、別に、積みゲー終わらせてたから更新遅れた訳じゃないんだからッ！　後、下手な文章は許してほしいんだからねッ！　あ、後最後の方手放しなのも許してほしいんだからねッ！

はい、というわけでずっとゲームやってました。ごめんなさいm（＿）m

だって夏休みなんだもん！　いいじゃないか、学生の特権だ！……

ごめんなさいm（＿）m

ご存知でしょうが、相変わらず下手くそです。ご容赦ください。最後の方手放しです。もうあきらめました。無理だ俺には、書けねぇ、あきらめよう。とわたくしの心が折れたからです。ご理解の程を。

最後に、更新の遅れ、文章手抜き（がんばったけど無理だった）など、物好きなこれをみてくださってくれている方にお詫びをm（＿）m

では本編です

インデックスと魔術

夜。空はいい具合に黒に染まっていた。表通りから救急車と消防車のサイレンが響いて――通りすぎる。

「……誰かさんがスプリンクラー動かしたせいで、必要以上に騒ぎがでっかくなっちまったな」

路地裏を移動している宗像がわざとらしく聞こえるか聞こえないかくらいの音量で呟く。

「ええ、ええ、わたくしのせいですとも！」

宗像の呟きはしっかり上条の耳に届いており、半ば逆ギレ気味に答える上条。

その上条に抱えられた少女はインデックス。

外国人相応に肌は白く、髪の毛は銀髪。その身に纏った修道服は純白で要所要所に金糸の刺繍が織り込まれ、成金趣味のティーカップを思わせる風体だ。

ひときわ目を引く格好だが、それ以上におかしな点があった。

それは背中部分。純白の修道服は真っ赤な血染めによって変色し、着ている少女の命が危ういことが直ぐにわかることだろう。

宗像はチラリと視線を後ろへ向ける。

視線の先にはインデックスと上条がいる。

「しっかし、今度はどんな不幸だ……」とか、「偽名使うならもう少しマシなのなかったのかよ」とか思いつつ、宗像は深くは聞かないことにする。

「おい、オイ！　聞こえるか？」

そこで何かを思い付いたように、上条はインデックスの頬を軽く叩いた。

「お前の一〇万三〇〇〇冊の中に、傷を治すモンはねーのかよ？」

上条の言葉は軽く聞き流す宗像。よっぽど「一〇万三〇〇〇冊ってなんのことだよ」「この真っ赤っかのシスターどこで拾った？」「速く病院つれてかねーとやべぇぞ」などど喉まできた言葉を無理矢理消化する。なにせさっき何も聞かないと決めたばかりなのだ。最速で崩れかけた決意を新たに、二人の会話に耳を傾ける。

激痛より出血のせいで浅く呼吸を繰り返すインデックスは、蒼ざめた唇を震わせ、

「……ある、けど」

上条は一瞬喜びかけたが、インデックスは“けど”と言葉を濁した。宗像もそれが気になり、二人はインデックスの言葉を待つ。

「君達には……無理」

「治療はやっぱり病院のが良いってことか？」

上条よりも早く宗像の口が開く。しかし質問の答えは全く的外れで、インデックスは上条をみて、

「……君は特にだけど」

上条の右手を見て、

「『超能力者』っていうのがもうダメなの」

熱帯夜の中、真冬の雪山のように体を震わせて、

「魔術っていうのは……、君達(エスパー)みたいに『才能ある人間』が使うためのモノじゃないんだよ……。『才能ない人間』が……、それでも『才能ある人間』と同じ事がしたいからって……生み出された術式と儀式の名前が、……魔術」

「……、んで？　そのマジュツってのは何で能力者には使えねーんだ？」

そんな状態でなに電波な事言ってんだ。とよっぽど思った。

何せ超能力すら科学で解明しているのに魔術(オカルト)など信じられるはずないのだから。だから宗像は訝しげに、インデックスに、尋ねた。

「『才能ある人間』と『才能ない人間』は……、回路が違うの……。『才能ある人間』では……『才能ない人間』のために作られた魔術(システム)を使うことは……、出来ない……」

「なっ……、」

唯一の希望を打ち砕かれたように上条は絶句した。

確かに上条や宗像達『超能力者』は薬や電極を使い、普通の人間とは違う脳の回路を無理矢理に拡張している。体の作りが違うと言われれば、確かに違うのだ。

だとすると、と宗像は思考を巡らせる。

学園都市には二三〇万もの学生が住んでいる。しかし、そのすべては能力開発の『時間割り（カリキュラム）』を受けている。その力は弱くとも、それは間違いなく脳の回路をこじ開けた『能力者』なのだ。少なくとも学生には魔術とやらはつかえないことになる。

「ち、くしょう……、」

上条は獣のように犬歯を剥き出しにして、
「そんなのって、あるか。そんなのってあるかよ！　ちくしょう、何なんだよ！　何で、こんな……ッ！！」
心底悔しそうに、自分に吐き捨てるように上条は言った。
インデックスの震えがひどい。
何より上条が耐えられなかったのは、自分の無能のツケが彼女へ行く所だった。
何が『才能ある』力だと吐き捨てる。
そんな上条の様子を見て、宗像のイライラが募る。
「いい加減にしとけよ、当麻」
「何を……だよ、何を！」
突きつけられた『ルール』に奥歯を噛み締める事しか出来ない自分への怒りで語気を荒げてしまう。
「いつも他人に偽善振り撒いてるクセに、手段がないからごめんなさい見捨てますって全っ然笑えねえよ、まだ助けられるのに何悲劇の主人公演じてんじてんだよ」
「……ッ！！」
何も言えない。言葉が出てこない。事実だから。全部、事実だから。けど、それでも――――
「……じゃあ、じゃあ他にどうすれば、いいんだよ……？　どう足掻いたってこの街に住んでる二三〇万の学生には、インデックスを助ける事が出来ないのに――――」

と、上条は自分で言ったことに違和感を覚えていた。
学生には？

「あの人なら、力になってくれんじゃねえのか？」
「ああ……ああ！　いや、でも待ってくれ」上条はインデックスに声をかけ、「おい、確か魔術ってのは『才能ない』一般人なら誰でも使えるんだったな？」
「……え？　うん」
「さらに『魔術の才能がないとダメ』なんてオチはつかねーだろうな？」
「大丈夫、だけど……。方法と準備さえできれば……。あの程度、中学生だってできると思う」インデックスはちょっと考えて、「……確かに、手順を踏み間違えれば脳内回路と神経回線の全てを焼き切る事になるけど……、私の名は一〇万三〇〇〇冊（インデックス）だから、へいき。問題ない」

上条は笑った。
思わず頭上を見上げ、夜空の月に向かって吠えるように。
確かに、学園都市に住む二三〇万人もの学生は、みんな何らかの超能力を開発されている。
だが、逆に言えば。超能力を開発する側の――――教師たちはただの人間のはずだ。

「……あの先生この時間でもう眠ってるんて言わねーだろうな」
「どうだかな？　少なくとも早く寝ても身長は伸びなかったんだろ」

二人は一人の教師の顔を思い浮かべる。
クラス担任、身長一三五センチ、教師のくせに赤いランドセルが良く似合う一人の先生、月詠小萌の顔を。

―――――――――――
―――――――
―――

「……」

宗像の視線の先にそれはあった。木造二階建て、東京大空襲も乗り切りました。築年数軽く半世紀以上！　テへっ♪

「普段ならネタにできるんだけどな……」

ボロボロで至るところが錆びた鉄の階段を上がり、二階の一番奥の前までやってくる。そこには『つくよみこもえ』とひらがなでかかれたドアプレートがあった。
ドンドンドン！　とドアを叩く。

「……無反応」

にっこり笑顔で左拳に力を入れてそれをドアに叩き付ける。要はぶん殴ったのだ。もちろんそんな事をすればただではすまないが、宗像は自身に受けるダメージを他所へ押し付ける事が出来るのだ。

バゴン！　と少しドア板がへこんで、「はいはいはーい、今開けますよー？」中から可愛らしい声が聞こえてがちゃりとドアが開いてピンクのウサギのパジャマを着た、小萌先生が顔を出した。

「あ、宗像ちゃんです、どうかしたんですか？　こんな時間に」
「よぉ、小萌先生、ちょっと助けてほしいんだ、あがるぜ」

少し開いたドアに指を入れ、そのまま開こうとすると、「わわ！　ダメです！」とマジかという力でドアを閉められる。指を挟んだ状態で。

「ギャー、あう、あうあう」
「はっはっ、自分でやってパニクるなよ」

笑いながらドアを開けると目の端に涙を溜めた小萌先生が。

「指、指が、宗像ちゃんの指がぁ」
「なんともねえよ」
「ほんとに？　ほんとにほんとです？」

宗像の指をペタペタ触りながら今にも泣き出しそうな小萌先生をなだめて落ち着かせる。

「先生、一瞬ひぐらし的なのを感じましたよ……」
「鉈なんか持ってねえから！　つか、本題話していいか？」
「ですー？」
「五分もしないうちに当麻がここにくる。怪我人を連れてな」
「えっ？」

小萌先生は少し驚いた様子で宗像の言葉を待つ。

「ちっとばかし厄介な事になってて、頼れる大人は小萌先生だけなんだ……力を貸してやってもらえねかな？」

小萌先生は少し考えてからため息をついて、

「しょうがないです、でも事情は上条ちゃんに聞きますよ？」

「ああ、それでかまわねぇ」

話が一段落したところでぴんぽんぴんぽーん、と二回チャイムの音がしたあと、まもなくドゴン！　と玄関の方から凄まじい音がした。

「多分当麻だ……先生、今度は指挟むなよ？」

「わ、わかってますよぉ」

そう言って小萌先生はパタパタと玄関へ走っていく。走っていくほど広い部屋ではないのだが。

「はいはいはーい、対新聞屋さん用にドアだけ頑丈なんですー。今開けますよー？」

そう言ってドアを開けると涙目の上条が立っていた。

そしてしばらく上条と小萌先生が話をしたあとずかずかと上がってきて、宗像が開けたスペースにインデックスをうつ伏せで寝かせる。

「き、救急車は呼ばなくって良いんですか？　で、電話ならそこにあるですよ？」

小萌先生が少し震えながら部屋の隅を指差す。そこには昭和２７ごろから普及しはじめたあのダイヤル式の黒電話が何故かあった。

「まだこんなのあったの――」
「――――出血に伴い、血液中にある生命力（マナ）が流出しつつあります」
反射的に上条、小萌先生、宗像はインデックスの顔を見る。
インデックスは変わらずうつ伏せの状態でいる。壊れた機械の様にピクリともせずただ静かに、目を開けている。
恐ろしいくらい冷徹な瞳。

「――警告、第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を越えたため、強制的に『自動書記（ヨハネのペン）』で覚醒めます。……現状を維持すれば私の身体はおよそ十五分後に必要最低限の生命力を失い――絶命します。指示に従って適切な処置を施して頂ければ幸いです」

虚空を見つめたインデックスを見て、上条の方を見て、首を左右に振りながら「あわわ、あわわ」と小萌先生は迷子になった小学生の様に慌てている。

「先生」
「ひゃひ！？」
「俺、今から人呼んできますから、後頼みます」
「えっ……え……！？」
「この子、宗教上の理由でその……救急車に乗せられないんです。くわしくはその子に聞いてください。もう時間がねェし」
小萌先生は宗像との会話を思い出して、少し黙って、
「わかったです！　事情はわかりませんけど……出来る限りの事はやってみるですよ」

カツンと鉄の階段を下りる音が二つ。

「……宗像」
「ん？」
「先行って話つけといてくれて助かった」
「んぁ？　別にかまわねぇよ。それより青髪にも一応、一応礼言っとけよ？」
「わかってる」
「さて、回復魔法とやらが終わるまでこのオンボロアパート離れようぜ？」
「……そうだな」
「当麻？」
「ん？」
「時間あるんだ、話聞かせろよ？」
「……あぁ」

インデックスと魔術（後書き）

どうでしたか？　下手くそでしょう？　誰か文才をくれ！
まあこんな感じで続くんで、応援してくれたら涙が出るほど嬉しいです。多分いないけど……

ではではこんな駄文にお付き合い頂き本当にありがとうございました

……、重っ（前書き）

最近マイコー（マイケルジャクソン）のＢａｄのｐｖを初めて見て、カッチョいいと思いました。
それとまったく関係ないけど、文の最初にスペースをぶちこみました。読みにくかったら言ってください。元に戻します。
あとぶちこんだからって文章の方は成長はしてない。文才をおくれー
下手くそだけど、覚悟はいいなッ？　あの人が出てきますよ、期待しないで待ってな！

『では本編です』

……、重っ

翌日、宗像は小萌先生の住むアパートへ向かっていた。
昨夜上条から話を聞いた後、一度寮に戻ったりして時間を潰していたからだ。

寮には相変わらず警察が見張っていて入れなかったが、二、三日もすればば入れるようになるだろう。
これは他の階と違い事件現場となった上条、土御門、宗像の事で、三人の中でも一番酷いところは上条の部屋のドアが跡形も残さないくらいに溶けてしまっていたこと。

そして被害はあまり無かったものの痛い事に宗像の部屋のドアノブは溶けてしまっていて部屋に入れないことだった。

身体中にあんな黒煙に晒されて着替えさえ用意出来ないのは苦痛だ。というより一連の事態がもう苦痛でしか無かった。着替えは取れない、シャワーを浴びれない、小萌先生宅（築年数半世紀以上）にお邪魔するしかない……

「不幸だあああああ！」

朝焼けに向かって叫んでから思う、「なんだ……？　この空しさと痛い視線、口に出さないと消化出来ねえんだよ、こっちは」と痛ましい呟きを残して足早にその場から移動する。

そこから十五分くらいしたところで小萌先生の住むアパートに着い

た。

「相変わらずのボロっちいアパートだな……」

昨日は気づかなかったが、通路にドカンと洗濯機が置かれている辺り風呂場という概念はないらしい。「そういえばそれらしいトコは無かったっけ」と昨日入った小萌先生の家の間取りを思い出しながら呟いた時、カツンと軽い音が頭上から響く。

「あれ？　宗像ちゃん？」

「よぉ、小萌先生、買い物かなんかか？」

（おつかい？　って聞いたら怒んだろうな……）

どこもかしこも錆びた鉄の階段から声を掛けてきたのはこのアパートの住人、月詠小萌だ。

「そうですよー、シスターちゃんが熱出したので、何か力の付くものでも作ってあげないといけませんからねー」

「ふーん、熱ね……、というよりかオレとしちゃあ小萌先生が料理とかスゲー意外なんだけど。ちゃんと美味い飯作れるワケ？」

「……、ひょっとしなくても宗像ちゃん、ちょっと本気でバカにしてます？　先生こと」

「……。」

「無言は肯定と受け取っていいんですか！？　お料理くらい美味しく作れますよ！　それとも見た目が十二歳で酒好きの愛煙家じゃいけませんか！？　上条ちゃんといいシスターちゃんといい先生のこと舐めてやがるです！　宗像ちゃんもですよ！」

「いや、少し落ち着けって。そこまで言ってねえから、まあなんだ、大丈夫、安心しろオレって子守り得意だから」

「そ、そうなんですか？　……って、え？　それってどういう……」

「よし買い物行こう。荷物もちがいた方が良いだろ？　よし行こう、すぐ行こう、もう行こう、早く行こう」

――――――――――

「なん、でっ……オレがこんな、目に！！」

「イヤー、先生助かっちゃいます♪　ついつい缶ビールを買いすぎちゃっても持ってくれる生徒を持つなんて幸せものですー♪」

宗像の左手にはそこそこの食材が、右手には袋いっぱいの缶ビールが……二つ。

「大人気ねぇ……、先生気ねぇ……、アンタ確信犯だろッ！？」

「えぇ？　先生まだまだ子供だからちょっとわかりませーん」

「ちくしょう、こうなったら覚悟しろよな？　小萌先生？」

宗像の持つ異能の力、『不慮の事故』は“重い”という“ダメージ”を押し付けることはできない。これは自分の意思で大量の荷物を持っているからだ。

しかし、重さを感じる感覚を他人に押し付けてしまえば“重い”という“ダメージ”は、感じなくなる。
ただ、適当なところに押し付け続けなければならないので、疲労が溜まる。
もっともその疲労さえ他人に押し付ければ問題ないわけで……

「オレの能力知ってるよな？」
「えぇ、確か他人にダメージを押し付ける……でしたっけ？」
「その通り！　覚悟はいいな？」
「ち、ちょっと待ってください？　宗像ちゃん、まさか……」
「その、マサカだよ」

宗像がニヤリと笑った瞬間、小萌先生はグッと目を閉じ、押し付けられるであろうダメージに備える。

「……ッ！」

「……？」

「……ッッ！？」

そっと目を開くとそこにいるはずの生徒の姿はなく、後方でブーッと車のクラクションが鳴る。

「すすいません、今、退きますからっ！」

横断歩道の信号機はとっくに赤に変わっていた。小萌先生が立ち止まった場所はちょうど真ん中らへんで、足早に横断歩道を渡りきると、その先の道を鼻歌交じりに路地を曲がろうとしている生徒の後ろ姿が。

「あれ？　小萌先生どこ行ってたんだ？　急にいなくなったから心配したんだぜ？」
ぜんぜん心配してない軽い口振りで言う生徒。
「……、宗像ちゃん舐めてやがりますね、先生わかりますよ。そんなに先生のことといじめて楽しいんですか？　ひょっとして変態さんです？」
「いや、いじめられっ子の瞳で言われても……」
「もう嫌ですー、宗像ちゃんと二人だといじめられます！　先生はこんなに歩み寄ろうとしてるのに、好意を踏み躙られますー！」
逆ギレ気味に言ってから、歩き……、早足……、ダッシュ……。
「ダッシュ！？　つか速いっつの！　何で徐々にランクアップしてんだよ！」
はぁ、とため息して、「少し、やり過ぎたか……？」と小さい呟いてふと、
「……、」
道は既に小さく、二〇メートルないし二三メートルくらい先であのアパートに着くところ。
人とすれ違えば、確実に気付けるはずなのに。
「……。」
振り返れどもそれらしい人影はなく、何も、ない。気配は、確実に、ない。

けれど感じる。

圧倒的な、存在感。

押し付けられる、嫌悪感。

擦り付けられる、怠惰感。

そして何より同じ“匂い”のする、劣等感。

オレは知っている。この感覚を。この――――

『　　。』

肩に掛けられた手が、一瞬で無気力へと誘い込む。

『やっほー、もしかしてって思って声かけたんだけど、無視されちゃったからね。さすがに僕でも傷つくなあ』

無邪気で、どこまでも邪な、

『まっ、馴れてるんだけどね、いわれなき迫害とかさ』

身体中の酸素が減り、毛穴という毛穴から冷や汗が吹き出る。

「よぉ、久しぶりだな……会うのは二回目か？」
『三回目って言っても問題ないけどね』

背筋がゾワリとなるような屈託のない笑顔。

「……それで？」
『それでって？』
「用もなく、ただ声を掛けたってワケじゃねえだろ？」
『んー、まあね……仕事かな？　僕もいろいろやらなきゃいけないことがあるからね』

やれやれ、と少年は肩を竦める。
この少年の動作一つ一つに嘘臭さを感じる。息を吸って、吐く。その動作にさえ。

「で、それとオレがどう関係あんだよ？」
『そうだなあ、立ち話もなんだから駅前のハンバーガーショップで話さない？　ちょうど人のズボンに落ちてたお金を拾ってきたから奢ってあげるよ？』
「いいぜ、ただ、こっちにも都合ってもんがある。昼の一時でどうだ？」
『いいよ、それじゃ！』

学ランの少年は踵を返してスタスタと立ち去る。振り返ることなく手を振りながら。
名前も知らないあの少年は、不安も嫌気も懸念も緊張も、キレイに混ぜ合わせてただただ、気持ち悪く。そんな気分にさせられる。初めて会った時もそうだった
宗像はいつの間にかどこかに痛み（重さ）を押し付けるのも忘れていた。

「まぁいいか」

そして宗像はぼんやりと振り向いて、

「……、重っ」

そんな呟きが唇から洩れていた。

……、重っ（後書き）

重さとは位置覚、運動覚、重量覚、抵抗覚によって身体の位置、運動の状態、身体に加わる抵抗、重量を感知する、深部感覚によって感じる？らしいです。
よくわからない。他にも、感性的認識とかあるらしい。
実際に宗像君にどーやったの？って聞いても「はぁ？よくわかんねえけど、なんとなくこうかって、やってみたら出来た感じだな」って答えらるのがオチかと。
正直どうしようと思った。かなり。完成間近の文は間違って消しちゃうし。一から書き直しだし。二日前の出来事だし。あれはさすがに泣けた。

そういえば、この小説見てて球磨川のこと知らない人いるのかな？
　めだかボックスですよ？　ジャンプ連載漫画ですよ？　禊ちゃんですよ？　まあいいか

でわでわこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

好きにすりゃあいいんじゃねえの（前書き）

夏休みも残すところあとわずか……ｏｒｚ
二、三日くらいでもう一話くらい投稿したいな
では本編です

好きにすりゃあいいんじゃねえの

不思議と引かれるカリスマ性。

気のいい先輩。

魅力的な妄言。

尊敬できる生き方。

友達みたいな親近感の湧く軽い性格。

ついて行きたくなるような無邪気な笑顔。

そんな羨ましいことこの上ない奴がこの世にいるとは微塵たりとも思わない。

人には一長一短があって、人はそれを受け入れ、譲歩し、妥協する。

それが当たり前で誰も彼もがそう。

オレ以外は。

――――――――

――――――――

――――

「駅前のハンバーガーショップだったか」

約束の場所、午後一時に駅前のハンバーガーショップで待ち合わせ。何てことはない、数時間前の約束を守るために呟いた一言。

駅前の通りにはやはり十二時を過ぎたとはいえ、あちらこちらの飲食店に入って行く人が目に入る。それは目的地のハンバーガーショップでも大差なく、涼しい店内でシェイクでも飲んだら最高だな、と無駄な思考を巡らせて宗像は店の中へと歩みを進めた。

自動ドアを抜けると一瞬で空気が冷たくなり、そこで宗像はぐるりと店内を見回してみた。

「……、ビンゴ」

店の一番奥のテーブルに座った、未だに名前すら知らない少年を見つけて、宗像は軽く頭を掻いた。

宗像から見て後ろ向きに少年は座っていて、よく見えないがテーブルには他にも人がいるように見える。宗像は小首をかしげたが、それも直ぐにやめて奥のテーブルへと歩き出した。

「ん？　お前……現川、か？」

「あっ、は……」

『あっれー清舟ちゃんだ、遅かったね』

少年達のテーブルに着くと見知った顔があり、そっちの方に声を掛けたが、少女に向けられた言葉を学ランの少年がドリンク片手に遮って、笑顔で振り返る。

「……、今はテメェに話してねえ。それよか何でテメェはオレの名前知ってんだ？　えぇ？」

『んー、何でだろうね？』

「今度は記憶喪失か？　精神科に行くことを強くオススメするけど？」

『ありがと、心配してくれるんだね。凄く嬉しいけどほら、親を心配させたくないから止めとくよ』

「そりゃ残念、お前みたいな奴が一生入院してれば世の中平和なんだけどな」

皮肉交じりに言ってから、少年と対面している少女の隣に腰かける。

「で、お前現川だろ？」

「そっ！　だです！」

いひゃい……舌噛んだ……。と涙目になっている現川を横目に少年へと視線を向ける。

「だですってなんだよ……で、その現川と学ランが何で一緒にいるのか説明してくんない？」宗像は表情を変えずに、「まさか偶然なんて面白可笑しい冗談抜かしたら張っ倒すぞ」

『だってさ現川さん、なかなか恐ろしいこと言うんだね？　そんな性格なんじゃ、精神科に行くことを強くオススメするけど？』

「そりゃどうも、残念だがオレはまだ誰に何を言ってるのか理解できるから遠慮しとくわ」

面倒くさそうに言ってから思わずため息が洩れる。

『ところで清舟ちゃんさぁ』

「……あんだよ？」

『転校しない？』

「はぁ？　何言ってんだ、お前」

『はいコレ』

少年は、徐に茶封筒を取り出して宗像の前へ置く。

『開けて見てみてよ。面白いものが入ってるから』

宗像は眉を顰めつつそれの中身を取り出し、確認する。

「……、コレって『書庫（バンク）』のデータだよな？　しかも……」

『そっ、清舟ちゃんのだよ』

「何でテメェがこんなもん持ってんだよ？　いや、というよりかお前、何者なんだよ？」

『え？　僕？　そうだなぁ……』

コホンッとわざとらしい咳払いの後一呼吸置いて。

『第二箱庭学園異常選抜十三組――二年マイナス十三組、球磨川禊』

『僕の過負荷（マイナス）は現実（すべて）を虚構（なかったこと）にする「大嘘憑き（オールフィクション）」……、こんなもんでどうだろう？　わかってくれた？』

「いや、全然わかんねえから……、その異常選抜マイナス十三組、大嘘憑きの球磨川禊さんはどうしてオレに転校しろと？」

『自覚はないようだから教えてあげるけど、清舟ちゃんも間違いなく過負荷だからだよ』

口の辺りで両手を組んで、嫌らしい笑顔を見せる球磨川。
「……だからオレに転校しろって？　残念だがそりゃあ出来ねえな、球磨川」
宗像は、今まで球磨川に向けていた鋭い視線を止めて落ち着いた口調で続ける。
「オレは二つの理由があって今の学校に通い続けてる。何でか分かるか？」
『んー、なんだろう？　初恋の人が居るからとか？』
「っ！？」
球磨川の言葉に反応を示したのは宗像ではなく、今まで黙っていた現川の方だった。
「オレは人を好きになったことはねえから……、つか何でお前が反応してんだよ」
「え、あ、それは……」
顔を真っ赤にして言葉が尻すぼみしていく現川から再び球磨川に視線を向けて、
「それで、だ。例えオレがお前らと同じ過負荷？　だとしてもだ。今の学校を変えるつもりはない」
『弱ったなあ……あ、そうだ！　僕が清舟ちゃんの学校行って潰してくればいいんだ！　そうすれば清舟ちゃんの理由もなくなるよね？』
「あぁ、そうだ。まあ好きにすりゃあいいんじゃねえの」
『よかったあ、一件落着だね！　そうそう、清舟ちゃんも何か頼ん

でくれば？　奢ってあげるよ？』
「それはいい、ていうか球磨川よ」
表情の消えた瞳に写っているのは球磨川ただ一人。自分でも驚くくらいに低く呟いて、突き立てた中指を自分でへし折る。
指は嫌な音を立ててあり得ない方向へと曲がるが、寧ろ綺麗に曲がっていて滑稽にも見える。

『え』

球磨川が言葉を発すると同時に宗像の中指は清々しいほどにピンと真っ直ぐに伸びていた。
宗像の持つスキル、『不慮の事故』の発動だった。

『ぐ、あ…指が……！　痛い……い、たい』

仮に球磨川の言っていたスキルが本当だとすると、指が折れたくらいどうってことはない筈なのだ。人の腕くらいある螺子で四肢を貫通しても死なない――死をなかった事に出来るのなら。

「あ、くま、球磨川さん！？」
「冗談キツいな、心配すんな現川。お前立派な役者だよ、球磨川」
『あれ？　ばれた？』
「最初からな」

宗像は感情のない笑みを浮かべたまま、中指を自分の左目の中に突っ込む。
ぐちゅりと不気味で耳障りな音は、球磨川の瞳から流れる血と共にしたもの。

「大変だな球磨川、骨折のあとは失明か？」

わざとらしく言って見せる宗像。
当の球磨川は、閉じた左目から血涙を流してなお他愛ない笑顔を浮かべている。

「確かにお前が好きにするのは良いけどよ、オレが好きにさせるとは言ってねぇから。」
宗像はやや語調を変えて、「あそこには大事な玩具があんだ。やり合おうってんなら受けて立つぜ？　『大嘘憑き』」

続けてゆっくりと立ち上がり、出口に向かって歩き出す。
が「そういえば」と途中で歩いた道を引き返していたずらっぽく笑い、「じゃあまた、明日ぐらいに」
それだけ言い終わると、さっさと店の外へ出ていく。

『あ～あ、フラれちゃったなぁ。何か意趣返しっぽいこともされたし』

そう言いながら球磨川は、ハンカチで頬を伝う血の涙を拭き取りながら無邪気な笑みを浮かべていた。

好きにすりゃあいいんじゃねえの（後書き）

『そういえば現川さん、全然しゃべんなかったね』「はい……私って口下手なんです……」
という会話があったに違いない

ていうか相変わらず文章上達してません、わかります。

宗像くんが上条さんとおんなじ学校に通ってる理由ってなんでしょうね？

まあ他にも書くことがありそうですが、この辺で

ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

私達は待ってる（前書き）

長らくお待たせしてごめんなさいｍ（＿）ｍ
というか待っててくれる人なんているのか？と疑問に思う今日この頃。

さて、本文中に「何が言いたいのかな、せいは」と言うインディアンさんの台詞がありますが、「せいしゅうって何か言いづらいかも」と言う会話があったはずなので宗像の事を『せい』と呼んでます。
ご都合主義？　誉め言葉です。

ついでにいうと文章力は（ｒｙ

では本編です

私達は待ってる

折角の夏休みに数日が無駄になって、そろそろ幸福が訪れてもいいんじゃないのか？　と心から思いたかった七月二十七日。

ここ数日で様々な事が分かったし、起こった。

まず、回復したインデックスの要望で、銭湯へ行った上条が例の魔術師に襲撃されたこと。

次に、球磨川の言っていた第二箱庭学園の事。上条達同様に、敵にマークされてはいるようだが、宗像自身のスキル『不慮の事故』によって、どんなに襲撃されようが関係無いため、自由に動き回った。それでわかったことは、第二箱庭学園という学園は存在していないということ。近くの図書館に行き、学園都市の学区内の学校を調べ上げ、念のため小萌先生にも協力してもらった結果、何の情報も出てこなかった。

むしろ清々しいほど何もなくて、逆に故意的に隠蔽されている可能性も考えた。ハンバーガーショップで話した時の球磨川の口ぶりからすると確実に存在しているような話し方だったし、過負荷という能力についても球磨川や自身のスキルが実在している辺り、否定できない。

分かったこともあったが、疑問も増えたのもまた事実だった。

「よぉ、当麻は相変わらずか？」

そして現在、コンビニで買ったプリン片手に宗像は小萌先生の家にやって来ていた。

「あ、宗像ちゃん……、上条ちゃんは見ての通りです」

そう言って小萌先生は宗像から、包帯ぐるぐる巻き状態で寝ている上条へと視線を移した。

「良さそうには……見えねぇな」

「そりゃそうですよ。道路にボロボロの上条ちゃんが倒れているのを見つけたときは心臓が飛び出るくらいびっくりしましたよ、先生」

「そんなに？」

「はい。文字通りボロボロでしたからね」

「ふーん……んで？　あれは？」

言いながら宗像は純白のシスターに視線を向ける。

「ここ三日間、ろくに寝ずに上条ちゃんの看病してるんですよ。『私のせいでこの人が怪我したんだから私が看るのは当然なんだよ』って言って全然代わってくれないんです」

「なるほど、ね。……んじゃ、今日は留守番頼まれるから外出てこいよ」

「はい、一応シスターちゃんにも言ってありますが、もしも上条ちゃんが起きたらお粥食べさせて上げてくださいね」

「あぁ、分かった」

「じゃあ先生、行ってきますね」

そう言うと小萌先生は部屋から出ていった。

宗像は手に持ったコンビニ袋をちゃぶ台の上に置いて、窓枠に腰掛けた。

「なぁインデックス、その袋ん中、素敵なもんが入ってるぞ」がインデックスは動かず、「いらない。とうまがこんな状態なのに、私だけおいしいもの食べられない」
「……そっかよ。じゃあオレが全部美味しく頂いてやろう。うめーぞぉ？　とろけるぞぉ？　あめぇーぞぉ？」
それでもインデックスは動かない。余程責任感じてんだな、と今度はやや語調を変えて言う。
「はぁ……その袋ん中当麻の好物だから、起きたら食わしてやれ。オレ、ちっとばかし寝るわ」
足元の適当なスペースに腕を枕にして横になって、天井を見つめる。
そこで、半ばしかめっ面のインデックスに宗像は言う。
「インデックスよぉ……、そいつって誰のためにそんなんなっちまったんだろうなぁ？」
「……そんなの言われなくたって分かってるよ」
「もちろん、インデックスの為だよな？」
「何が言いたいのかな、せいは」
インデックスの声は、平坦で淡々としたように聞こえる。でもそれは、インデックスのムスっとした感情を表していた。それでも宗像は続ける。
「だから、インデックスの為にボロボロになったのに、そいつが目覚めた時にお前がぶっ倒れる何てマヌケはすんなっての」
「私は倒れないし、マヌケじゃないもん」
「そういうことじゃなくて、無理すんなっつってんの……、そいつ

の為にもな」
「……。」
返事はなかった。何の意味の無い事をしたところで所詮は意味の無い事。上条の傷はインデックスのせいであることは間違いない。けれどそれは、上条自身の意思なのだ。インデックスの為なら、と。いくらインデックスが肩肘張ったとしても上条が起きるわけではないのだから、出来るときに出来ることを、最善で最良を行うことが道理だと思う。頼れる人が近くに居るんだから。
目を閉じてしばらくすると狭い部屋のなかに、チャチな音楽が流れ始める。
「……オレか」
宗像が徐にズボンのポケットをまさぐり始めると、携帯電話を取り出した。
「非通知……？　ちょっと出てくる」
インデックスにそう言って部屋から出たところで電話に出る。
「……」
『……あ、あの』
「アンタ……、誰？」
相手の出方を探るように低く、鋭く言った。
『え、あ、うう現川です』
すると、萎縮した声と共に意外な人物の名前が出たため、宗像は少

しの間首を傾げていた。だが、それもわずかな事で、すぐに電話の声に反応する。

「あ？　現川？」

『はい、……えと』

現川の言葉を待ちながらドアに寄っ掛かり、ふと宗像が下を向くと白い板が転がっていた。

『宗像くんの足元に、キーが落ちている筈なんだけど……』

現川の話を聞きながら宗像は白い板を拾った。

「あぁこれ、カードキー？　白いヤツ」

『それです。それ、第七学区のホテルのキー』

「はぁ？　何それ」

『球磨川さんがもう一度宗像くんと逢いたいって言ってるの。だから今夜午前零時まで待ってる。私達は待ってる。宗像くんが来てくれることを信じて』

球磨川という言葉にわずかに宗像の眉根が動く。

『それじゃ、待ってる』

現川が言った後、一呼吸置いて、「……、待ってろ」

会話はそれだけだった。

クスッという笑い声の後、電話が切れてツーツーと無機質な音が耳に付く。

宗像の唇から吐息が洩れた後、ポケットの中に携帯電話とカードキーを入れたとき、背後から声が聞こえてきた。それも、インデックスともう一人の声。

「当麻起きたのか……」

突っ立ってたってしょうがないので、とりあえず部屋の中へ入ると、

「とうま、とうま。私の右手には何があると思う？」

「何がって、お粥……ってオイ！　待て、重力落下は待」

もちろん上条の言葉など聞き入れられる訳もなく……

真っ白な上条当麻もとい、お粥とお皿で真っ白な上条当麻に苦笑を浮かべながらタオルを投げてやる。

「何かの遊び？　それ」

「お粥かけられる遊びなんて、上条さん知りませんよ……てかタオルサンキュー」

布団や衣服についたお粥を拭き取る上条達を横目に宗像が窓枠に腰掛けると、不意にノックの音が狭い部屋に響いた。

私達は待ってる（後書き）

「ちっくしょォォォ！　調子のってンじゃねぇぞ三下がァァ！」

少年が地面を踏んだ瞬間、バキバキッとコンクリートが悲鳴を上げて割れた途端、それらは一斉にもう一人の少年へと向かっていく。人間の目で追える速度を、軽く越えたコンクリートの破片は容赦無く少年へと突き刺さり、抜けて行く。

「クソったれがァァァァ！」

それでも白髪の少年は攻撃を止めようとはしない。足元に転がるコンクリートの破片を蹴り飛ばすと、速く、鋭い弾丸と化して少年の身体に吸い込まれていった。弾丸を受けた身体は宙へ浮かび、後方へと投げ出される。が、瀕死の筈の少年は何事もなかったかのように起き上がり不敵に笑って、軽く言って見せた。

「――あーあ、こんなもんかよ、一方通行ァ」

え？別に本編とは関係無いですよ。僕の脳内での妄想です。

前回から時間が経ちすぎて内容を割愛しすぎた、本当は二十四日くらいから始まる予定だった。自分が分かりやすくするため二十七日からになってしまった。後悔も反省も、ついでにいうと涙した。期末テスト（学校が前期後期制なため）やらパソコンを言い訳に……ｏｒｚ

見てくれている人に申し訳が立ちませんね、本当に申し訳ございま

せんでした。
次回は近日中に上げられたら良いですが、わかりません。
ではでは、こんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

待ってろ（前書き）

前回の前書きで、インデックスの事をインディアンと間違えていた……

しかも素でｏｒｚ

さて、今回も相変わらず文章力（ｒｙ

あと、今回投げ出した。諦めた。下手くそだ＼（＾ｏ＾）／

まぁそんな感じで期待したいで下さい

では本編です

待ってろ

ノックの音に反応してインデックスと宗像はドアの方を見る。

「こもえ、かな？」

「……つーかテメェ一言ぐらいゴメンなさい言いやがれ」

ドア越しに聞こえる、あれー、うちの前で何やってるんですー？

と言う小萌先生の声はおそらくドアをノックした人間に掛けられたもの。

じゃあいったい誰が？　と宗像、上条が首を傾げていると、「上条ちゃーん、何だか知らないけどお客さんみたいですー」

がちゃん、とドアが開く。

グッ、と宗像の瞳に鋭気が宿る。

小萌先生の後ろに、黒衣の魔術師ともう一人多分上条を襲った魔術師であろう奇抜な格好の女が立っていた。　二人の視線はインデックスへ向いている。

上条から聞いた話だと彼らの目的は、インデックスの持つ一〇万三〇〇〇冊の回収だった筈だ。

上条を襲撃した際、近くに宗像が居た訳ではない。ならばインデックスを回収し、何処かに監禁しておけば話は済んだ筈だ。だが、どういうわけか魔術師達はそれをしなかった。

窓枠に腰掛けたままふと上条へと視線をやる。

誰の目から見ても上条は萎縮していた。目の前にいる炎の魔術師も、凄い風体の女魔術師も、相当な実力者であると上条自身が知っていたから。

そんな上条を見て炎の魔術師は楽しそうに、「ふうん。その体じゃ、簡単に逃げ出す事もできないみたいだね」

言ってからなるほど、と宗像は思った。
この三日間、ずっと上条を看続けたインデックスが上条という病人を置いて逃げる筈がない。逆をいえば、安全に連れ帰る事ができる。腑に落ちないのはこのタイミングなのか。邪魔となりうるだけの要素があるのに。
力づくでの回収なら上条も黙ってはいないだろうし、宗像も静観するつもりは毛頭無い。
だが、

「帰って、魔術師」

インデックスは立ちはだかった。
その小さな体で、怪我人である上条を庇うように両手を広げ、端然として言い放つ。
その姿はまるで罪を背負う十字架のようで。
上条という足枷をはめられたインデックスは、逃げる事を止めていた。

「……ッ」

微かに魔術師達の体が震えたように見えた。
この小さな少女を追い詰めているという罪悪感、もしくは少女の愚行に対する嘲笑、或いはもっと別の感情かも知れない。
ギチギチ、と壊れた歯車のように流れて行く空気に、上条が口を開く。

「……ッ、や、めろ。インデックス、そいつらは、敵じゃ……ッ」
「帰って！！」

インデックスは聞いていない。

「おね、がいだから……。私ならどこへでも行くから、私なら何でもするから、もう何でも良いから、本当に、本当にお願いだから……、」

魔術師達に向けられる怒気はボロボロと崩れ落ち、少女みたいな泣き声を混ぜて、

「お願いだから、もうとうまを傷つけないで」

それは少女の少年への想い。
聖女のような真っ白で純粋な心だから向けられる想い。
無意識で宗像は息を呑んでいた。
純粋過ぎる心は、まるで色の無い濃霧のようで。

「リミットまで、残り十二時間と三八分」

いつしか炎の魔術師は凍える視線で言っていた。
魔術師の言うリミットが何なのかは理解はできなかった。

「『その時』まで逃げ出さないかどうか、ちょっと『足枷』の効果を見てみたかったのさ。予想以上だつたけどね。そのオモチャを取り上げられたくなかったら、もう逃亡の可能性は捨てた方が良い。いいね？」

冷徹に魔術師は告げた。
インデックスは、何も答えない。
それから魔術師達も、何も言わずに部屋を出て行った。
　再び元の時間を取り戻したように、

「大丈夫、だよ？」

広げていた両手をゆっくりと下げて上条へと振り返るインデックス。

涙と安堵でボロボロの顔のまま。

「私が、『取り引き』すれば」上条は目を閉じた状態で、「とうまの日常は、これ以上壊させない。これ以上は、絶対に踏み込ませないから、へいき」ゆっくりと思考していた。

――――――――

夜。

元々本調子ではなかった上条が眠りから覚めて、それから少し話をした。

インデックスのこと。魔術師のこと。

「んで？　残酷な幸福（であい）を取るより、少しでも不幸（わかれ）を軽減しようってこと？　それで仲間の仲間の背中斬って殺しかけたんじゃ世話ねぇな」

上条が寝ていた布団の横に突っ伏した状態で寝ているインデックス

を見ながら宗像は呟いた。
インデックスは、この三日間の疲れや緊張に、一気に襲われたように眠りこけている。

「なぁ当麻？」
「あ？」
「もしも一〇万三〇〇〇冊の魔道書、全部『なかったこと』になったら……面白いと思わねぇ？」
「なッ！？　そんなことできんのかよ！？」

ごく僅かな希望でもすがりたい、インデックスを失いたくない上条は噛みつくように言う。

「さあな、確証はねぇけど。ただ……」

宗像はイタズラっぽい笑みを浮かべ、

「ムカつくんだよな、ああいうの」
「……、」

口に出して肯定はしない。けれど、心のどこかで同じことを思っていた。
魔術師達は諦めたのだ。勝手に見限って、勝手に決意して、勝手に追い回して。
自分達がインデックスの記憶を失う前も後も、見ていたくなくて。
ところが宗像はそれ以上の悪意を持って言っていた。
彼等の努力も信念も覚悟も、何もかもを踏み躙るつもりで。挙げ句、最後にざまぁみやがれと笑ってやろうと考えていた。

「そういう訳だから、ちょっと出てくる」

そう言って宗像は立ち上がる。

「それとこの話は『なかったこと』に、な」

「何でだよ」

「何度でも言うが確証はねぇ。……、そういうこった」

じゃあな、とそれだけ言い残し宗像は部屋から出る。

部屋から出た宗像は、携帯と共に入れられたソレを取り出した。

昼間、現川と話したとき拾ったホテルのキー。

あの時現川は『私達』と複数であることを口にしていた。

なら、球磨川がいる可能性が高い。

「……、待ってろ」

宗像はカードキーを見ながら、そう呟いていた。

待ってろ（後書き）

飛び散る飛沫。耳をつんざく爆音。
後に残るはめくれ上げたコンクリと、光の尾を引くオレンジの残光。

『え？』

痛みより先に感覚が無い事に気が付いた。
今も絶え間なく飛び散る飛沫何なのか、肩より流れ落ちるソレが何なのか、考えるより速く痛覚は反応した。脳に焼き付く痛みに、脂汗を浮かべている少年は無意識なのか、口の端を歪めた。それは痛みによるものなのか。
痛みで狂った笑いや痛みに耐えられないからならまだよかった。
あの少年の行為は、理性ある、自分の腕が無くなったと自覚していてなお浮かべている笑いだとしたら。
考えただけで肩が震える。足がすくむ。
少女の放った一撃は“倒す”一撃ではなく“殺す”一撃に変えた筈だった。しかし全力で放ったコインは少年の命を刈り取ることが出来ずに終わってしまった。それが少女の最低の行いにして、最大の過ちだった事に今、ようやく気付いて悟った。
自分の心がどれだけ豊かで生ぬるいと言うことを。

『あっれ～？　どうしたの御坂ちゃん、具合でも悪いの？』

愉しそうに、

『もしかしてもしかしなくても』

愉快そうに、

『後悔しちゃってる？』

笑いながら、

『僕の事、殺せなくて』

少女の悲鳴が街の何処かで木霊する。

え？本編とは関係ないですよ。僕の脳内での妄想です。

寧ろ本編より楽しく書いている件について。
もっと細かく書いたら字数多くなるので途中で止めたけど……
まぁ文章上達の練習としてしばらく？お付きあい頂けたら嬉しいです。
次回辺りは原子崩しと大嘘憑き……ゲフンゲフンっ
ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

嫌いじゃあないぜ（前書き）

あーまとまらないｏｒｚ
うまくならない……
グダグタｏｒｚ
もう物語を完結する前に逃げ出しそうｗ
エンディングはもう決まってるんですけどね

前回と同じくまとまってません。すいませんｍ（＿）ｍ
がんばります。あと少しずつ加筆、修正していくんでご勘弁を。

では本編です

嫌いじゃあないぜ

家を出て二〇分弱。第七学区のホテルを探し続け、走り回った結果、見つけた。
特に当てがあって探していた訳ではなかったが、球磨川（どうるい）の考えそうな事を予想し、学区内で一番高い高層のホテルに向かった。
その最上階、最低の少年は未だ街を移動する人々を見下ろし、劣等感を感じながら待っているのだろうと考えると、なんとも酔狂なヤツ、と宗像は思った。
昼前拾ったカードキーを使ってロックを解除し、部屋に入る。
室内は無駄に広く、高そうなベッドや装飾品等があり、一面の窓ガラスに夜景が映し出されていた。
その夜景の前に少年は立っていた。

『ずいぶんと遅かったね』

球磨川は夜景を見ながら言った。

「コッチはいろいろ立て込んでたんでね」
『ふーん、僕はてっきり来ないかと思ってたよ』

振り向きざまわざとらしい笑みを浮かべる球磨川に、苦笑を覚えながら宗像は答える。

「冗談キツいぜ？　嘘憑き」
『あれ？　バレてた？』
「最初からな」

宗像はいつかの会話を思いだし、今度は表情に出して苦笑する。

「そういや、現川は？」
部屋を見回し、電話を掛けてきた張本人がいないことを球磨川に尋ねた。

『彼女は仕事に行ったよ』
「仕事、ね」
『そそ、お仕事』
「あっそ、んで？　話ってなんだよ。二人仲良く内緒話ってガラじゃねぇだろ」
『それもそうだね。この前の話の続きなんだけど』
「第二箱庭学園」いっそう訝しげに、「そんな学園、ねぇだろ？」
『いや、在るよ』

しかし球磨川は何の気なしに言って見せた。
そんな様子に、宗像は険しい眼差しを向ける。

「はぁ？　分かるように説明してくんない？」
『簡単な事だよ』

球磨川は言い方に含みを入れて、

『存在しない企業が資金を提供し、実在しない学校が研究機関となり、名前の無い学者が研究する。』
「……なるほどな」

普段と態度の違う、低い声で宗像は呟いた。

「要するに、大きな声で言えないような――たとえば人殺しとか」

『んー、おしい！　まぁ僕はエリートと呼ばれる連中を殺せればいいし、間違いじゃないんだけど』

口調とは裏腹に、殺伐とした単語を並べる球磨川は笑顔で続ける。

『だから清舟ちゃんにはぜひとも手伝って欲しいなあ、エリート抹殺計画』

「……そのエリート抹殺計画って何が良いワケ？　何か理由があっての事なんかよ？」

『エリートなんて奴ら、皆殺しにしたほうが住みやすいと思うなあ。なんせ馬鹿ばっかりの世界なんだから』

「そのためエリートを殺すのか……ずいぶん勝手な理屈だな」

だけど、と宗像は目を伏せて呟く。

「嫌いじゃあないぜ、そう言うの」

『うん、それでこそ清舟ちゃんだ！』

両手を叩いて喜ぶ球磨川。

一段落したところで、入り口からノックの音が響く。

「球磨川さーん、戻りましたー！」

聞き覚えのある女の子特有の甲高い声がして、黒いビニール袋を手に少女が部屋に入ってくる。

『あ、おかえりなさい現川さん。……、ソレが彼女かな？』

球磨川は少女の手にあるビニール袋を見ながら淡々と言った。

「はい、首だけちゃんとありますよ、確認できるように。……見ます？」

現川に聞かれて、球磨川は僅かに顔をしかめて答える。

『さすがにそれは遠慮しとくよ、お疲れ様だったね』

「はい、それじゃ私部屋に戻りますね、夜更かしは馴れてないんです」

それだけ言って現川はビニール袋を置いて、部屋を出ていく。

部屋を出ていく際、宗像に笑顔を向ける現川を苦笑交じりに見送って、球磨川に疑問を投げ掛ける。

「それ、ヒト入ってんの？」

『正確には首以外ミンチの無機物、かな？　名前は確か婚后光子って子だよ』

嫌いじゃあないぜ（後書き）

少しずつ、自分のペースで頑張ろうかな……
下手くそなりに努力しよう！

努力はしますが改善とは言い切れないのが残念ですｏｒｚ
できるかぎり頑張るんで、最終話までお付き合い出来れば良いですね

ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

自分でつけた約束くらい（前書き）

あー、もう何がしたいのかわかんなくなってきたw
まとめられないし本当に投げ出したい気分だよぅｏｒｚ
ほんとは上条さんとオリ主ぶつけて、球磨川さんが引っ掻き回して、
んでもってオリ主の暗いとこ描こう！　って頑張ってみたけどセン
スがないよね……。しばらく休暇をいただこう。あとペルソナ４ア
ニメ面白い……、ザゴールデン買う……。
まぁこんなもんかな

では本編です

あ、今回短いですよ

自分でつけた約束くらい

「……。」

突き抜けた天井。無数に散らばる光の羽の中心で少女をかばうように突っ伏している少年、上条当麻を宗像は見ていた。

「貴方は……」

と、女魔術師、神裂火織は宗像の気配を感じ、それにつられるように炎の魔術師、ステイルも振り向いた。

「よぉ、魔術師」

口調こそ軽いものの、月明かりのような冷たさを帯びた言い方に、ステイルと神裂は眉をひそめる。

「何の、用でしょうか？」

相手の出方を伺うように慎重な声色で神裂は言った。

「言わなくてもわかってんだろ？」ズボンのポケットに手を突っ込んで、「台無しにしに来たんだよ」

「……ッ」

宗像の一言で魔術師達は行き詰まるような緊張感を漂わせる。そんな様子を見て宗像は不敵に唇の端を上げてみせた。

「んで、ソイツどうすんの？」

言いながら宗像は上条達の方を見る。

「眠ってる間に殺すなんて事ないよな？　もしそうだとしたら――」

静かに、そっと言う。

「殺すぞ」

狭い部屋で反響すらしない小さな声。その小さな声は二人に、異常なまでの敵意を与えていた。

「……別に、何もしないさ」

渇いた唇からそんな声を出したのはステイルだった。

「ふーん……。ま、せっかく見つけた玩具を手放す気はないからそのつもりで」

それで用は済んだとばかりに宗像は部屋を出た。

『……お帰り、清舟ちゃん』

外に出ると壁に背中を預けた球磨川が普段通りの他愛ない笑みを浮かべながら待っていた。

『どうだった？』

「別に、何にもねぇよ。……、約束は守るから心配すんな」

『そう？　じゃあ早速だけどお願いしようかな』

浮かべる無邪気な笑顔に、際限のない邪を挟み込んで、

『清舟ちゃんにお願いしたい人は“食蜂操祈”ちゃんっていう子なんだけど』

「ソイツも常盤台？　まぁ“常盤台狩り”なんだから常盤台の生徒なんだろうけど」

『そそ、レベル５の超がつくエリートだよ』

僕らが抹殺しているね、と球磨川は片目を閉じて平和そうに笑みを浮かべる。

「約束は守るさ……自分でつけた約束くらい」

つまらなさそうに呟いて、宗像は古ぼけたアパートの階段を降りていった。

――――――――

――――――

――――

朝。街全体の機能が動き出したころ、朝焼けの空に一機の飛行船が

浮かんでいた。飛行船のお腹にくっついた大画面が学園都市ニュースを垂れ流している。内容は常盤台の生徒が死体で発見されるというもので、そのうち常盤台中学が有するレベル５の能力者、食蜂操祈が風力発電のプロペラに引っ掛かっているのを発見されたというものだった。

一通りの内容を確認してから大儀そうにあくびして、宗像は朝焼けに染まる街を歩き始める。

ある少年に会うために。

自分でつけた約束くらい（後書き）

しばらく休暇をいただきます。
僕ぁもう無理だｏｒｚ

つかもう最終話は描いたのであとはそこに向かって走るだけ！　んで、その道中をもっと細かく描くので次話はしばらく投稿できないかもです。
ついでに、時系列はここからおかしくなります。
ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

くだらねぇな。（前書き）

音楽療法と言うのがあるように、音楽が与える心理的なプラスの面は大きいと感じることがあります。

例えばドレミの歌やアファベットを覚える時にはまず、歌で覚えると思います。

そして算数や数学の時にはリズムに乗りながら検算していくと少しはやく問題が解けるそうです。

僕の場合は、「ｏｎｌｙ　ｍｙ　ｒａｉｌｇｕｎ」や「ｓａｉｌｉｎｇ　ｄａｙ」を聴くと創作意欲を掻き立てられます。

集中したい場合はトッカータとフーガ（鼻から牛乳～♪の元ネタ）等を聴いています。

まぁ、何が言いたいかと言うと、ウォークマンを買いました。そりだけ。

では本編です

くだらねぇな。

長く延びた病院の廊下。
陽の光を反射したリノリウムの廊下は、寝不足の目には痛いくらいに眩しく、煩わしそうに目を細目ながら歩いて行く。
大儀そうにあくびをしながら入院患者の病棟を進んで行くと、ある病室のネームプレートに書かれた少年の名前が目に止まった。

上条当麻

そこに書かれた名前の少年は、つい昨日まで一人の少女の為に戦っていた。
別段喧嘩が強いわけでも、格別頭がいいというわけでもない。
なのに、少年は命を掛けて戦った。
普段なら街のゴロツキや首輪の外れたチワワから追い回されるような非力な少年は、得体の知れないバケモノじみた力を使う“魔術師”に、たった一つだけの武器、『幻想殺し(イマジンブレイカー)』で勝って見せた。まるで漫画やライトノベルの主人公のように。
そんな主人公(ヒーロー)見たいな奴だからこそ興味があるんだろうな、と宗像は思った。
なんとも面白い奴、と苦笑交じりにドアのノブに手を掛けようとしたとき、内側からの力で不意にドアが開かれる。

「おや？　君も彼のお見舞いかい？」

上条の病室から出てきたのは小太りの白衣を着た中年の男だった。
まあ病院(こんなところ)だし、医者なんだろうな、と適当に流した宗像だったが、医者の胸元のＩＤに小さなアマガエルのシールと医者の顔を交互に見て、自覚はあるんだな、と小さく苦笑した。

「……まぁ、そんなところだな。て言うかアイツは？　大丈夫なの？　アンタ、医者だろ？」

大丈夫なのか、と言ってみたものの、正直なところ上条が無事なことは知っていた。

というより球磨川がその事を知っていた。何故知っていたかはあえて言及はしていないが、『書庫（バンク）』のデータや、常盤台の生徒名簿を持っていた辺り、その情報に正確であることは確かと言えるが、ロクなモンじゃないとはハッキリと分かった。

ただ、カエル顔の医者は宗像の予想に反して、僅かに眉根を寄せた。

「無事と言えば無事なんだけれど……あるものを除けば、ね」

「あるもの……？」

「記憶、だね」

医者の答えは、宗像が考えたものより大きく方向性が違っていた。というより“記憶”と言われて驚くほどに狼狽した自分自身が居た。

どうしてだ？　と思考を始めてすぐにハッとした。

球磨川との約束。インデックスの一〇万三〇〇〇冊の記憶をなかったことにする、ということ。

結局それが実現することはなかったが、

「回り回ってこういう事かよ……締まりわりぃっつーか、らしいつーか」

グシャグシャ、と頭を掻いて嘆息する宗像を見て、カエル顔の医者から「……急にどうしたんだい？」と、声を掛けられる。

「いんや、なんでもねぇよ……つーか、仕事戻んないの？　こんな暇人相手にするほど医者って暇なわけ？」

少し態度悪く、物臭そうな言い方に医者は小さく肩をすくめる。

「……んー、それじゃあ僕は戻るよ。くれぐれも彼をよろしくね？」

「前向きに検討しとく……まぁもう二度と会うこともないだろうけど」

「僕もそれを願っているよ」

医者なんてのは本来ならいない方がいいんだからね、と言い残し、カエル顔の医者は廊下を歩いて行った。

「どう、すっかな……」

一人になった病室の前、耳の裏を掻きながら小さな吐息が洩れる。記憶喪失、と言ってもその種類は様々で、受傷した時、それ以降の出来事を記憶できなることや、受傷した際に、それ以前の記憶が抜け落ちる事がある。

どれも軽重はあるものの、重さによっては全くの“他人”と呼べるかもしれない。医者がその事について触れていなかったが、もしかするともしかするかも知れない。

宗像が会いに来たのは“上条当麻”であって同じ名前の他人ではない。ハッキリ言ってしまえば宗像の中にある上条当麻の価値はほぼゼロ。“壊れた玩具”になんかなんの価値もない。

「んでも、このまま帰んのもなんかシャクだよな……」

不満そうに、宗像はドアをノックした。

中からの返事が言い終わる前にドアを開けて部屋へ入って行く。

「……えーっと」

上条は心中、うわうわ！　誰か来た！　と焦りの色を目元に浮かべる。

だが、驚いてばかりもいられない。上条の唇が、知り合い（のハズ）に言葉を発する。

「久しぶり？　だな……？」

「昨日会ったばっかだけどな？」

「……（汗）」

宗像に見透かされたような笑みをされ、尚更焦りが表情に露になる。

「嘘つくんならもっとうまくやれよ？　そんなんじゃ誰にだって丸分かりだっつーの」

「な、なん――」

なんの事だ、と言おうとして、止めた。

どんなに嘘で取り繕うとも、この少年は真実だけを瞳に映し出すような気がしたから。

「……、ごめん。」

「別に、謝られる事はしてねぇよ。てか、記憶無いんだろ？　いつからだよ？」

ズボンのポケットに両手を突っ込んで、真剣な眼差しで宗像は問いかけた。

「……、最初から」

白に包まれた病室、ベッド近くの窓が風を取り込み、カーテンを揺らす。

明るい室内とは対照的に、上条の表情は、暗い。

「……、最初からって、お前、そりゃどういう……」

「最初から何もかもだよ！　ほんとはお前も誰だかわかんねぇし、自分が誰かもわかんねぇえんだよ！」

半ば逆ギレ気味の告白。宗像の瞳は、腐乱の色を僅かに湛え始める。

「それでも俺は、上条当麻であるって決めたんだ。俺はあの子に、インデックスに……、インデックスの泣き顔なんて見たく――」

「くだらねぇな。」

一言。たった一言。上条の想いは、螺子伏せられる。

虚を突かれた上条の口は、動けない。

冷ややかで、冷徹で、冷然な宗像の言葉。その瞳はもはや、腐った死体のような色をしている。

この時、宗像の中の“上条当麻”は、価値を、失った。

「お前の人生はお前のモンだし、好きにすればいい。ただ、“誰かのため”なんて偽善的な事に他人を巻き込むなよ」

曇り一つない腐乱した瞳で。

「……、インデックスには黙っといてやるよ、偽善使い（フォックスワード）」

宗像は小さく息を吐き出すと、部屋から出ていく。何かを言いかけた上条を無視して。

くだらねぇな。（後書き）

前に一度改行のたびにスペースをいれたことがあると思いますが、今回から採用しようと思います。
たまに入ってなかったら、「ヲイ、スペース入ってねぇぞォ」といっていただけるありがたいです。

ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました。

あり得ないですわ（前書き）

突然ですが、今回ご覧になってくれる方々に謝罪しなければならない事があります。
わたくしは、友人とテレビゲームに夢中になり、本来投稿するハズだった月曜日深夜に投稿することが出来ませんでした。
しかも、今回投下する内容は、最初考えていた内容より半分近く短くなり、うまくまとまっていません。
これもひとえにわたくしの不徳のいたすところでございます。
誠に申し訳ありません。
どうか、皆さま方の寛大なお心を賜りたく思いたいと思う所存であります。

……、まぁ、要するに、色々サーセンm（__）m

では本編です

あり得ないですわ

『ハチャメチャが押し寄せーてく～♪』
「私オレンジで、宗像君は？」
「オレ、ジンジャー、あとポッキーとか」
「うん、わかった！」
『泣いてる～場合じゃない～♪』

せっかくの夏休み、何で球磨川達とカラオケに来てるんだ、と半分以上本気で思った八月二日。
能天気に歌う球磨川とは対照的に、第七学区の外れの廃ビルに居た白井黒子の顔は、暗かった。

「先月で七件、そして行方不明が四件……そして八件目」

黒子の唇から重々しく吐息が洩れた。

事の次第は約一〇分前。頭の悪そうな連中五人が路地裏の先へと女の子を連れ込んだとの通報だった。
いくらセキュリティをしいて、警備ロボットを走らせたところでこういう輩が出てくることは、前々から理解はしていた。
だから風紀委員（じぶんたち）がいるんだし、今回もその手でオチがつくのだろう、と現場へと向かった。

そして、現場に着いた黒子の目の前には、建物と建物の間に薄暗く延びた路地があった。その入り口から取り込んだ僅かな光が、突き当たりの廃ビルの、半開きになったドアをほんの少しだけ明るくしていた。
じんわりと額に、夏の暑さを浮かべながら、黒子はゆっくりと路地の奥へと進んで行く。
すると、不意に複数の悲鳴が頭上から降ってくる。
女性以外の悲鳴。それは間違いなくこの女性を連れ込んだ男のものだった。
暑さとは別の、汗の嫌悪感を全身で感じながら黒子はビルの階段を駆け上がって行くと。

「あ、い、ひ、ひとが、人が」
「どうなさいました!?」

「だ、じ、死ん……、死んでるッ!」

この男の後から四人の男が飛び出てくる。
そのたびに、古くなったドアがギィギィ、と耳障りな音を立てて開く。
その僅かな隙間から覗ける空間は。

「……、ッ!?」

へたり込んだ少女の姿と、まるで十字架にくくりつけられた罪人のように、壁に縫い付けられた、常盤台の生徒だった。

三〇分後、警備員（アンチスキル）が到着し、現場に居た六人が保護された。

「君が通報してくれた風紀委員の子だね？」

なにやら仰々しい格好をした警備員の男が黒子の元へとやって来た。

もっとも、能力持ちの学生を相手にするわけだから、当然と言えば当然なのだが。

「ええ、遺体は二階にありますわ」

「ああ、今他の奴が確認しに行ってるよ」

ところで、と一段落したところで警備員は少し声のトーンを変えた。

「君はもう帰りなさい」

「……、なッ！」

「君も常盤台の生徒だろう？」

まるで駄々をこねる子供に言い聞かせる親のような口調に、それ以上の言葉出なかった。

「……、わかりましたわ。今日はこれで……」

静かに頭を下げ、右腕に着けた深緑色の腕章を外す。

今回ばかりは異常すぎる程に異常だと言うことは黒子自身も分かっていた。分かっていながらなにも出来ない自分に腹が立つ。

黒子は外した腕章を手の中で握り、奥歯を噛み締める。

実際、学校の授業も午前中のうちに終了し、生徒が寮に戻るまで

の引率を行って今日の仕事は終了。立派に風紀委員としての仕事をした。
だからって自分もおとなしく寮に戻るのか？
そんなの――
「そんなのあり得ないですわ！」
手に握り締めた腕章を、ほんの少し、僅かな時間見つめて歩き始める。風紀委員第一七七支部へ向けて。

あり得ないですわ（後書き）

普段から、２１話位の長さで投稿する予定なんですが、前書きの通り僕のせいでうまくまとめられませんでした。ごめんなさいです。次回２３話は２２に収まるハズの内容だったので、割りと短いと思いますが、出来るだけ早く投稿する予定ですのでどうか、お許しを。

ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

だけど、早速死んでもらおう（前書き）

遅れて申し訳ない
文章力は（ｒｙ
修正候補

では本編です

だけど、早速死んでもらおう

「あれ？　白井さん？　何で支部に？」

元々間延びしたような話し方なのか、甘ったるい声でキャスター付きの椅子を回転させたのは、同じ風紀委員の初春飾利。

「何でって私も風紀委員だからに決まっているでしょう」

「それはそうですけど……」

初春の表情からは不安が浮かんでいた。理由はもちろん分かっている。

「そんな顔をせずとも心配には及びませんわ。私はテレポーターですし、危険になれば引くことも可能」

あなただってお分かりでしょう？　と付け加えて黒子は初春のパソコンを覗き込んだ。

「これは？」

「……、事件現場を線で結んでみたんですけど……」

未だ納得いかない様子で初春は答えた。

「ぐちゃぐちゃですわね……」

「まぁ、そう簡単には行きませんよね……」

「ドラマやアニメではあるまいし、当然でしょう」

「確かにそうですけど、こうも手がかりが無いと……」

少しふくれたように初春は顔をしかめた。

「まぁ、確かに情報の少なさは異常ですわね……」

「はい、監視カメラの映像も、目撃者も、何もないなんて……」

気持ち悪い、と内心思える程だった。街中にセキュリティを張り巡らし、警備ロボットを走らせ、衛星の目を光らせる。ここまでしているのに。ここまで厳重なのに。

「おかしいですよね……」

何一つ情報が上がってこない。

何が外より数十年文明が進んでいるだ、とよほど悪態をつきたくなったがそれを喉奥で塞き止める。

代わりに黒子は前向きに、そして意欲的に口を開いた。

「……、一から情報を洗い直しましょう。わたくしたちにはそれしか出来ないのですから」

「そう、ですね。でも白井さんは――」

「止めても無駄ですのよ、初春」

黒子の声色は鋭く、表情もまた真剣だった。

「……、分かりました」

その様子を見て、諦めの息を洩らした初春。

「その代わり絶対に支部（ここ）を出ないでくださいよ？」

これ以上諦めろだなんて言えなかった。

諦めの言葉は容易くは無い。しかし、これ以上の抑止は逆効果になることを初春は理解している。この白井黒子は、自分の信じた正義にどこまでも正直な人だから。

「……、ええ！」

――――――――――――

夕暮れのバス停。ジリジリとアスファルトを焼き付ける太陽は、ほとんど沈みかけていた。

何処かからか聞こえるカラスの鳴き声が良い子の帰宅時間を告げている。

「成果無し、ですの……」

夕暮れの茜色から宵闇の菫色（すみれ）に変わって行くのを見て、自然とため息が洩れた。

あれから今まで支部で調査を続けたが、進展はなかった。凶器の

螺子、監視カメラ、衛星。そのすべてが意図して改竄ないし捏造、削除された物に変わっていた。勿論犯人によってだろう。
もう何度目ともわからない嘆息を洩らす。
「後、七分……」
寮までのバスの時刻表を見て唇が緩慢に動く。
こんな状況でもバスが通っている辺り流石私立と少し呆れたが、情報の整理をするには調度いいとも考えた為、あえてバスの利用することにした。
「いつまでこんな事が――」
『生徒全員が死ぬまで、とか』
と、不意にこの馬鹿げた発言は黒子の思考に無遠慮なまでに割り込んで来た。
「え？」
『やっほー、白井ちゃん』
歩道沿いに続くガードレールの上に座るように学ランの少年は居た。
「……ッ！？　生憎、あなたに名前をお教えになった記憶が無いのですけれど……？」
突然掛けられた声に、牽制の意味も含めて、穏和な態度で声色に鋭気を込めた。
『そうだね、僕たちは初対面だよ、女子中学生』

少年は無邪気に、大人しく、
『だけど、早速死んでもらおう』
悪意を向けていた。
「……、次のターゲットは私というわけですの」
少年の発言と、何処ともなく取り出した禍々しい螺子を見て、黒子は全てを理解した。自分に差し迫った死を含めて。
『うーん、ちょっと違うかなあ。ホラ、君のルームメイトの御坂さんが狙いだよ』
「あくまで私は餌……ということ？」
『まぁ、そうなるね』
ニコニコ、と手にした螺子を弄びながら臆面なく語る少年に、黒子は恐怖以上に嫌悪感を抱いた。
『あ、いけね』
人差し指の上で弄んでいた螺子を少年が、バランスを崩してそれを落とした。
その様子を見逃す黒子ではない、とばかりに
太股に仕込まれた鉄矢を少年の足の甲をアスファルトに縫い付ける。
それとほぼ同時に、バックステップで道路中央まで引き下がる。
『……痛、い……、こ、これ刺さってるよね？』

足に突き刺さった鉄矢を見て、少年は軽く狼狽する。
これなら行ける、と少年の様子を見た黒子は慢心を心に生んだ。
少なくともこの時少年を捕まえる事が出来たなら事件解決、そんなことを考えていた。

『あー、痛かった。でも気にしなくていいよ』

直線距離にして十メートル前後、少年との距離は少なくともそのくらい離れてた筈だった。
じゃあどうして少年の足に刺さった鉄矢が転がっているんだ？
どうして左肩が痛いんだ？
ボタッ、とサマーセーターの袖から伸びた白い腕から熱い滴が流れ落ちる。
自分でも驚くくらいに左肩が熱を放出し、視界の四隅が明滅して動悸が速くなるのが分かった。
脳の神経を焼き付ける様なチリチリとした痛みに、思考するより速く、痛み和らげる様に左肩に右手を添える。

「……はぁ……はぁ」

黒子は荒く息を吐きながらゆっくりと振り返る。
そこに居たのは、血塗られた螺子を手にした少年。

「この……、能力は、一体……」

覚束ない頭を精一杯働かせて、どうにか能力の解明を図る黒子。
しかし、重々しく動く黒子の唇とは対照に、少年は軽快に口を開いた。

『「大嘘憑き（オールフィクション）」　君との距離を“なかったこと”にした』

「オール、フィクション……？」
『最近改造したスキルだけど、ようやく扱いに慣れてきたよ』
凶器を持つ手に力を入れて、少年は笑う。
『さぁ女子中学生、これで終わりだ』
息を飲んだ瞬間、黒子は文字どおり螺子伏せられていた。その一瞬で黒子は絶命を迎えた。
相変わらずの十字架を背負うような形で。

―――――――――――――――

その日の夜、常盤台中学が擁する御坂美琴宛に一通の小包が届く。
その中身は誰ともわからない血に染まった、一本の螺子だった。

だけど、早速死んでもらおう（後書き）

オリジナルの小説を描こうと設定やプロット練ってたら遅れました、申し訳ないですm（__）m

次回も多分遅れますが、“絶対に”失踪はしませんので、たまーに見てやってもらえると凄く嬉しいです。

ではではこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございました

よいお年を（＊，　艸、）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9205s/

とある不幸と不慮の事故(エンカウンター)

2011年12月26日01時12分発行